

上海特別陸戦隊の誕生

大正十年から昭和初年にかけて、我海軍陸戦隊が活躍するやうな事件はなかつたが、昭和二年支那動亂勃發と共に、再び目覺しい活躍が展開され、これを契機として、我國独自の上海特別陸戦隊の誕生を見ることとなつたのである。

昭和二年に入つて支那の國民革命軍は次第に北軍を壓迫して揚子江流域に進出した。聽て上海も危機に曝される状態となつた。一度び上海が動亂の巷となれば、我居留民の生命財産も危殆に陥る虞れがあつたので、我第一遣外艦隊では一ヶ中隊以上の警戒陸戦隊を揚陸して、上海の日本電信局に宿泊せしめ、命令一下直ちに出勤し得るが如くにして警戒した。同時に海軍では軍艦・驅逐艦を支那に増派して、上海・南京・漢口等に配備、特別編制の陸戦隊を上海と漢口に配備して治安維持に努めた。これが上海特別陸戦隊の嚆矢である。

支那動亂の勃發

三月二十一日 南軍の先鋒は上海に入り、警察署を襲撃、上海・吳淞間の鐵道を破壊するなど形勢漸く悪化した。吳淞にあつた山東軍一千二百名は鐵道によつて上海に向つたが、鐵道が破壊されて進むことが出来ず、そのうへ南軍に襲撃され、我が租界内に追ひ込まれる形となつた。もし租界内に遁入するが如き事態ともなれば、我が損害は甚大となるので、翌二十二日夕刻、海軍特別陸戦隊は山東軍の武裝を解除して治安を回復した。この頃南京方面の北軍も形勢日に非となり、二十三日遂に南京城を棄て、渡江撤退を始めた。

當時南京領事館警備の任に就いてゐた陸戦隊指揮官〇〇大尉は、當方より積極的行動に出てはならないこと、場合によつては忍び難きを忍び事端を醸さざるやう注意すること等の訓令を受けてをり、その上、南軍は軍紀嚴正であるから、此方から敵對行動に出なければ、日本公館又は日本軍人に對し不法の振舞はしなうと考へ、南軍が來ても、出来るだけ穩便に濟まさうと考へてゐた。

ところが二十四日入城した南軍は、我が避難民が集合した領事館に迫るに至つた。〇〇大尉

は武器を執つて戦ふべく決意したが、領事館責任者・避難邦人等が人命を助けるため無抵抗主義をとつてくれと懇請するので、これに従つた。南軍は遂に領事館に亂入して破壊・暴行・侮辱・脅迫・掠奪を行つた。これが所謂南京事件である。翌二十五日我が居留民を軍艦・驅逐艦に收容したが、〇〇大尉は責任を感じて、後に上海に於て自決を企てた。

四月三日には漢口にも事件が起つた。この日漢口を散歩してゐた我海軍兵と支那暴民との間に衝突があつたのが導火線となり、遂に暴民は我租界内に亂入し事態頗る重大となつた。恰も碇泊中の我砲艦・驅逐艦から陸戦隊を揚陸し、租界を完全に防備すると同時に、我居留民を在泊邦船に避難せしめた。その後、南軍は續々と北上し、動亂は遂に山東の邦人居留地にまで波及するに至つたので、政府は昭和三年四月山東出兵を聲明し、内地から第六師團を青島に派遣し、漸次膠濟鐵道沿線に配備した。

四月三十日北軍は遂に濟南を放棄して北方に退き、五月南軍が入城したが、五月三日賀耀租軍の支那兵は濟南商埠地に於て、突如我居留民の人家を襲撃、掠奪を開始した。我警備がこれを制止するや、彼等は衆をたのみ、各方面の兵を以つて一齊に我部隊と居留民の攻撃を開始した。こゝに於て我部隊は自衛上これに應戦、困難なる市街戦の後、四日支那兵を商埠地外に撃

退した。この事件に於て支那軍は十數名の邦人を虐殺、數十名に暴行・凌辱を加へ、邦人墓地を發く等言語に絶する暴虐を行つた。

我軍は支那側に抗議すると同時に、自衛上、濟南附近の支那軍に對し即時撤退を要求したが、誠意ある回答なく、遂に八日より十日に亘る戦闘の後、これを濟南二十支里外に撃退し、十一日第六師團は濟南城を占領した。九日には第三師團に動員令が下つた。

この昭和二年より三年に亘る支那動亂に於て海軍陸戦隊は上海・南京・漢口その他大小幾多の死地に機宜善處し、我權益を擁護し、在留邦人を保護してよく大事を未然に防いだ。我海軍ではこの動亂に鑑み、上海に陸戦隊を常駐せしめて、我權益の保護に當らしめることとなつた。

〔註〕 昭和三年三月海軍航空隊が編制された。その後米・英の日本海軍勢力縮小謀略はロンドン會議となつて現れ、昭和五年補助艦對米總括的比率六割九分七厘五毛を強要し我が三大原則は葬られた。これが對抗手段として我が海軍では航空隊増設に邁進した。昭和五年六月館山海軍航空隊が設置された。六年五月吳海軍航空隊が設置された。

一、滿洲事變と陸戦隊

ワシントン會議によつて、米・英は日本の孤立化を策し、南洋進出を封殺すると共に、支那大陸からも、我が勢力の撤退を要求する措置に出た。爾來支那は米・英を眞の味方なりと誤認し、各種國際會議に於ける日本の讓歩を見て、『日本怖るに足らず』と考へるに至つた。加ふるにアメリカは大西洋に對し守勢を採り乍ら、太平洋に對しては極力攻勢の方針に出、イギリスと共に支那國民黨を操り、滿洲の張學良を煽動し、ソ聯また張一派を支援し、米・英・ソ三國は軍隊の指導・兵器供與・借款等を與へて、積極的な對日攻勢を使嗾したので、我が東亞經綸の基礎は危殆に瀕するに至つた。

昭和二年以來、支那の排日・侮日・抗日は益々甚だしくなり、不法事件三百餘件を數ふる状態となつた。昭和三年五月には鴨綠江上流で海軍の若林中尉が慘殺されたのを始め、我軍艦に對する不法射擊事件が頻發した。昭和六年五月には萬寶山事件が起り、六月上旬には陸軍參謀本部の中村震太郎大尉虐殺事件があり、九月十八日支那將校の率ゐる二三中隊は奉天北大營の西南側柳條溝附近に於て滿鐵線路を爆破するに至つて、遂に滿洲事變が勃發したのであつた。旅順にあつた關東軍司令官本庄中將は、軍主力を以て十九日奉天に入つた。遼陽にあつた多門中將の率ゐる第二師團は十九日奉天の敵を完全に掃蕩した。我軍は電光石火二十一日吉林・

十九日チチハルを占領、翌七年一月二日張學良假政府所在地錦州・十一日錦西・二月五日ハルピンを占領、敗走する殘敵を爆撃して忽ちのうちに全滿洲を戡定して米・英・ソの野望を粉碎したのである。

この間海軍は北支方面に於ては青島に巡洋艦一隻、旅順に驅逐隊一隊を配備してゐたが、十一月八日天津に反張學良系の暴動が起つたので旅順在泊の驅逐艦刈萱・朝顔を白河々口塘沽に廻航せしめ、更に吳より第十三驅逐隊を第二遣外艦隊に増派して警戒に當つた。

中支方面では第一遣外艦隊の十三隻を揚子江口より重慶に到る千五百浬の間に配し、上海に特別陸戦隊約七百名を駐屯せしめた。九月二十六日香港に於て邦人六名の慘殺事件發生、十月十八日には支那暴徒數百名が、上海西部工場地帯にある内外綿第五、第六工場を襲撃し、同工場の一部を破壊した。我が陸戦隊は直ちに出勤し五名を逮捕、工部局に引渡し、更に陸戦隊本部より装甲自動車・機銃車各三臺を派遣して警戒、大事に至らずして鎮定した。揚子江上流各地にも排日運動が激化、宜昌・重慶では在泊警備艦の陸戦隊が上陸して租界を保護した。十月二十日には成都領事一行が重慶に引揚げ、二十一日重慶領事館も閉鎖、館員は長風丸に乗り、軍艦比良護衛の下に漢口に下航した。

かゝる情勢に對處し、海軍では軍艦對馬・天龍・常磐並に第二驅逐隊と共に特別陸戦隊二百名を第一遣外艦隊に増派した。廈門・福州・廣東などでも反日會の邦人壓迫が盛んに行はれ、十月十六日夜廈門領事館及び警察署附近に爆彈事件があつたので警備艦竹の陸戦隊が上陸して警備に當つた。

二、上海事變と鐵血陸戦隊

米・英等の尻押しによつて、滿洲事變勃發以來中支・南支に於ける排日氣分は益々濃化し、共産分子の暗躍と共に、國民政府も裏面にあつてこれを支援してゐた。昭和六年九月、上海に反日大會が開かれ、「對日宣戰」等を決議、抗日救國會を結成した。十二月三十一日には廣東軍司令部前に於て寺尾義廣が慘殺され、昭和七年一月二日福州にあつた北上艦長及び砲術長に對する暴行事件に次いで、九日上海日報の櫻田門事件に關する不敬記事が掲載され、十八日、上海三友實業會社職工の日蓮宗僧侶五名への暴行(中一名死亡)に我が上海青年同志會三十二名が謝罪を要求したに對し、又も職工が暴行し大亂闘となり、支那警官一名を仆し二名に重傷を

負はせ、日本人一名は射殺され、二名が重傷を負ふといふ事件が起つた。

二十日日本人俱樂部では居留民大會を開き、「陸海軍を派遣し、自衛權の發動により抗日運動の絶滅を期すべし」と決議、大會の流れは一千名の行進となり、村井總領事を訪ひ、陸戦隊本部に向つた。その途中中北四川路で支那人が二階からビール壘を投げつけたので、激昂は爆發して争鬭となり、日本人數名は重傷を負つた。同夜十時、鞆子路附近に集つた數千の支那人は、少數の日本人に暴行せんとする不穩の形勢があつたので、陸戦隊が警戒に當つた。二十一日上海日報は我陸戦隊への侮辱記事を掲載した。

日本側はこれらの事件に對し、その都度、支那側に嚴重抗議したが、吳鐵城上海市長に誠意なく、裏面に於ては敵對準備を進めてゐたのである。鹽澤第一遣外艦隊司令官は、二十一日、支那側が速かに満足なる回答とその履行をしなければ、適當と信する手段を執る旨通告した。二十三日、我巡洋艦大井と驅逐艦四隻、二十四日航空母艦能登呂が到着した。

この日上海市民聯合會は自衛團の組織、日本海軍上陸拒絶等の決議をなし、支那側は吳淞・龍華その他に戒嚴令を施行、日本人の通行を禁じ、同夜、抗日會分子は、佛租界内にある我公使官邸に火を放ち、十九路軍は租界近接地に土囊を築き、鐵條網を張り、日本人密集地に近い

開北に兵力を集中した。

一月二十六日村井總領事は吳市長に對し「二十八日午後六時までには明確なる回答をなすべし」と期限附最後通牒を發した。二十八日午後三時十五分、彼は我要求を全面的に承認したが、それは表面的なもので、支那側は益々挑戰的態度に出た。同日支那軍の配備によつて、開北方面の支那人が北四川路方面に避難し、虬江路方面の公安局巡捕二百名は夕刻から全部行方を晦まして、事態は愈々險惡となつた。そこで同日午後四時、各國軍事當局者は警備區域を協定し、各自その警備線に就くこととなつた。

午後八時三十分、佐世保より急派された特別陸戦隊第三大隊が第一水雷戦隊に便乗して到着し、更に在港の安宅・夕張・大井・常磐及び第二十二驅逐隊等の陸戦隊は相次いで上陸し、上海特別陸戦隊の指揮下に入り、二十三日到着した吳特別陸戦隊を加へ總兵力二千七百名に達した。午後十一時三十分警急集合が發令され、各陸戦隊は陸戦隊本部廣場に集合した。そして、「敵が攻撃に出でざる限り、我より進んで攻撃行動を採るべからず」

と云ふ命令の下に、午後十一時五十分までに、それ／＼新公園及び射的場方面横濱路方面・寶興路方面・三義里方面・虬江路方面・靴子路より北河南路方面及び天同路より東方境界方面に

進出する待機位置に就き、二十九日午前零時受持區域に就くべく行動を起した。

北四川路の東側地區には何事もなかつたが、西側地區に於ては、我軍が虬江路・三義里・その他開北支那街に通ずる街路に進出するや、忽ち支那正規軍の射撃を受け、我軍は自衛上これに應戰、こゝに日支兩軍は交戰状態に入り、上海事變が勃發した。

かくして我上海特別陸戦隊は、雲霞の如く殺到する數十倍の敵を向うに廻し、陸軍部隊の到着する二月十三日まで二週間以上も不眠不休の戦を続け、敵を一步も我警備地域に立入らしめず、居留民保護の重責を完うし、その旺盛強靱なる戰鬥力は世界を驚嘆せしめ、所謂「鐵血陸戦隊」の名聲を大いに發揚したのであつた。

我陸戦隊は出動以來迅速なる行動を以て、寡兵よく衆敵を破り、二十九日午前一時三十分までは、概ね豫定警備地域に到着したが、虬江路及び三義里方面に於ては、支那兵の頑強なる抵抗に遭つて非常な苦戦に陥り、所期の如く進捗しなかつた。前面の敵は廣東を出でてより百餘回の戰鬥に一回も敗れたことなしと云ふ十九路軍であり、その數三萬と稱される大軍であつた。

豫定線の配備に就く

虬江路方面に進んだ部隊は第一大隊第二中隊の二ヶ小隊、即ち吉松守中尉の指揮する第一小隊、坂口繁太郎特務少尉の率ゐる第二小隊であつた。吉松小隊が先頭に立ち宮越兵曹が尖兵長となつてアイシス前より虬江路に入り、逃走の公安局巡捕を追つて赦司克而路角に來た時、突然前方の二階家から射撃を受けた。これが事變最初の銃火であつた。吉松中尉は直ちに應射を命じ、後方にあつた重機銃を最前線に進出せしめ、二階家の敵を掃射せしめたところ、敵は辟易して十數分で沈黙退却した。

我軍は引續いて追撃すると約百米で敵の鐵條網のため前進を阻まれた、吉松小隊はこれを突破前進したが、敵は僅か數十米の距離で猛射し來り、我機銃は故障を起し、非常な苦戦に陥つた。この時第三大隊より装甲車一臺應援に馳せつけ、靴子路にあつた中隊長山仲傳吉中尉も、指揮小隊及び第三小隊二ヶ分隊を率ゐて應援、第三大隊の一ヶ分隊も來援したが、敵火激しく如何ともすることが出來ず、戦闘は膠着した。

そこで山仲中隊長は第二小隊を左翼方面に迂回し、停車場方面の敵に對し警戒せしめ、自ら

二ヶ分隊を率ゐて左翼に進出敵陣を右背より衝かんと企てた。午前一時三十分更に装甲車一臺來援し敵に肉薄して猛射を加へたので、敵は遂に支へ切れず、線路を越えて第二陣地に退却した。我軍装甲車は更に進んで猛射し、第二陣地の敵石炭倉庫を炎上せしめたので、敵右翼は浮足立つた。左翼に迂回した山仲中隊長は機を逸せず喊聲をあげて突撃し、敵を蹴散らし、午前三時三十分完全に第二陣地を占領した。

敵は北停車場及び寶山路踏切陣地に多數の兵力を集中し、我占領地の側方を衝かんとしたが、第二小隊は北停車場の敵陣五十メートルまで迫り、側方に對する防禦をなすと同時に、装甲列車及び敵陣を頭上から猛射した。午前十一時頃能登呂の飛行機が初めて開北の空に銀翼を輝かし、敵装甲列車を爆碎、北停車場を灰燼とした。本部工作隊は午後二時四十分、虬江路と寶山路踏切の鐵路爆破に成功、かくして虬江路方面の戦闘は一段落となつた。

三義里方面に向つたのは二十八日夜上海に到着したばかりの土地不案内の第三大隊の第七中隊であつた。中隊長太田靜夫大尉は部署を定め、二十九日午前零時發進した。岡村武男中尉の率ゐる第一小隊が耶家橋路より右に曲つて廣東街に出るや、忽ち左右兩側の家屋々上から拳銃・小銃・ベルグマン短銃の射撃を受け、前方土囊陣地から盛んに機銃の射撃を受けて死傷續出し

た。我尖兵は立停つて應射する餘裕もなく、突進また突進、鐵條網を破壊して一舉に敵陣を占領、零時二十分、敵を鐵路前方に壓迫した。太田中隊長が第一小隊長のところへ辿りついた時は、先頭の二三名は奪取した敵土囊陣地に據つて射撃してゐたが、敵の銃火の集注を受け、敵の手榴弾は前後に炸裂して慘憺たる苦戦の状況であつた。右翼三義里方面へ進出した竹山安次特務少尉の率ゐる第七中隊第二小隊は、便衣隊を掃蕩して三義里に入つたが、途端に左方道路上より猛射を受け、應援に駆けつけた内山小隊長は戦死、小隊員は竹山小隊の指揮下に入つて奮戦した。左翼方面に進出した吉廣仁三郎特務中尉の率ゐる第三小隊は鞆子路の便衣隊を掃蕩しつゝあつたが、中隊長の命により、廣東街に入り、多數の死傷者を出し、辛うじて中隊長の位置に到達した。

午前一時三十分頃廣東路方面苦戦の報に接した第三大隊長高橋一松少佐は、自ら裝甲車に搭乘して北部小學校を出發してこゝに駆けつけ、敵前十數米に進出し、線路前方の敵を猛射したが、敵の集注砲火を浴び、高橋大隊長・戰車長長谷部少尉外二名が輕傷した。

太田中隊長は、この膠着した戦局を發展せしめるため、吉廣第三小隊長に右翼三義里に迂廻を命じた。吉廣小隊長は三義里民家より路地に入り線路の家屋を占領して敵を攻撃したが、敵

は挫む氣配なく、敵陣地に潜入して放火することになり、決死隊を募つた。中間時義二等水兵等三名が率先これを志願、敵彈雨飛の中を匍匐前進、或は躍進し、敵地に潜入、炭小屋を發見してこれに放火した。これがため敵陣は猛火に包まれ、敵は算を亂して潰走し始めた。折柄能登呂の飛行機も來援して空から協力した。我軍はこの機に乗じ突撃を敢行し、夜明けの頃三義里一帯を完全に占領した。

寶興路・横濱路・青雲路・鞆子路及び天同路方面でも相當の激戦が行はれた。寶興路に進んだのは第一大隊第一中隊の第一小隊と第四號裝甲車であつた。約二町ほどして第一の鐵條網に直面、決死隊の一部を以て、正に鐵條網を破壊せんとする時、敵は突然撃ち出し、尖兵長下蘭武雄一等兵曹は重傷を負つて斃れたが、裝甲車は血路を開いて突進、更に第二鐵條網を除去し、敵を驅逐、午前一時完全にこゝを占領した。

横濱路に進出した第一大隊第一中隊の指揮小隊及び第一第三小隊は二十九日午前零時五分、横濱路に入るや忽ち敵の猛射を受けたが、鐵條網を突破して敵を驅逐、同二十五分敵陣地を完全に占領した。

第二大隊第五中隊は陸戦隊本部にあつて、直接防禦に當つてゐたが、午前零時六分頃、敵の

挑戦が明白となつたので、急遽同濟路及び天通庵路方面の偵察及び警戒のために出動、途中敵を驅逐しつゝ、藤田淳少尉の率ゐる第三小隊を尖兵として、破竹の勢ひを以て青雲路上虬江クリーク橋附近に進出した。この時對岸の民家に據る敵が猛射し前進を阻止されたので、古山兵曹以下六名より成る決死隊を募り、對岸の家屋を焼拂はんとしたが、敵陣間近くに迫り五名まで死傷し、この計畫は水泡に歸した。やがて第十五驅逐隊陸戦隊の第二小隊も來援し、本部工作隊も行動を共にしたが、午前十一時、鐵道線路まで下がれとの命令を受けて、各隊は退いて淞滬鐵道線路の守備警戒に就いた。

匏子路方面に進出した第一大隊第二中隊の指揮小隊、第三小隊及び裝甲車一臺は大した戦闘もなく、午前一時三十分頃から約一時間で租界境界の鐵門内側に陣地構築を完了、午前六時頃手榴彈及び四挺の機銃で敵の攻撃を開始したところ、敵は忽ち逃走した。

天同路方面に進出した第二大隊の第四中隊は公安局不逞巡捕約三十名の武装を解除、武器・彈藥を鹵獲した。第二大隊の工作隊は天同路と通州路とを結ぶ石橋及香煙橋を爆破した。天通庵路に向つた工作隊は午前二時、南洋女學校に潜伏の便衣隊及び正規兵から攻撃を受けたが、隊長山縣榮藏機關特務少尉は部下を指揮し頑丈な校門を押し倒して突撃、敵を撃退した。

かくして我陸戦隊は概ね午前五時頃豫定線に進出し、防禦陣地の構築を終へたのである。

閘北掃蕩戦を開始

一月二十九日午前八時、米・英領事が斡旋、支那側の申出によつて、日支兩軍が現在位置に停ることを條件として戦闘行爲中止の協定が成立した。然るに敵は同夜横濱路・寶興路・三義里及び虬江路の各陣地に對し二度まで逆襲し、その後も連日我軍を砲撃したが、我軍は停戦協定に鑑み、單に反撃を加へこれを沈黙せしめるに止めた。

政府は兩軍交戦の報と共に、龍田及び第二十六驅逐隊(柿・楡・栗・梅)・第三戰隊・那珂・阿武隈・由良・第一航空戰隊鳳翔・加賀・第二驅逐隊(峯風・澤風・沖風・矢風)と共に佐世保特別陸戦隊一ヶ大隊・横須賀特別陸戦隊一ヶ大隊を派遣した。これらの部隊は三十日から二月一日の間に上海及び吳淞附近に到着した。二月二日には第三艦隊が編制され、野村吉三郎中將が司令官に親補され、また佐世保特別陸戦隊一ヶ大隊が上海に増派された。

二月三日敵の執拗な反撃を制壓するため、閘北掃蕩戦を開始された。午前十時我野砲及び曲射砲は同濟路及び大東街交叉點附近に對して射撃を開始した。太田實少佐の率ゐる第五大隊は

午前十一時五分新公園方面の敵に對し攻撃を開始したが、第二大隊第五中隊の第二小隊も、これに協力して天通路の敵第一土囊陣地を占領し、更に第二土囊陣地に向つた。ところが敵は第二土囊陣地の右方五米の家屋から小銃・機關銃を猛射し、我が進撃を阻んだ。小隊長塚本昇中尉は榮川兵曹等五名の決死隊を選んで、敵家屋放火を命じた。四名はばた／＼と倒れ、藤田二等水兵たゞ一人石油罐を擔いで單身敵據點の家屋に突入して目的を達した。猛火に包まれた敵は狼狽して潰走した。この日我艦隊は海空から吳淞の敵砲臺を猛撃して、敵を沈黙せしめた。我軍は二月四日から五日にかけて開北全線總攻撃を敢行した。二月四日第五大隊の第十中隊は天通庵路より高野山に亘る敵を攻撃し、第十一中隊は高野山北側道路以北の敵を攻撃、五日早朝四明公所を占領した。この結果我が右翼方面は一つの據點を得ることとなつた。

二月五日開北方面の戦鬪に於て、古畑悦藏兵曹長の率ゐる機銃小隊は、第三大隊第七中隊の第四小隊と共に、大隊の第一線となり、開北正面の最高建築物で敵の最強據點たる商務印書館の占領に向ひ、午後一時三十分頃進撃を開始、敵陣は雨霰の如く飛來し、分隊は各個躍進を以て敵に迫り、午後二時印書館屋上を完全に占領、開北掃蕩戦はかくして一段落を告げるに至つた。我航空戦隊もこの作戦に協力目覺しく活躍した。

吳淞の敵前上陸

二月七日横須賀特別陸戦隊は陸軍部隊の先頭を切つて吳淞に敵前上陸を敢行、次いで第四戦隊及び第二水雷戦隊で到着した陸軍先遣部隊の久留米混成旅團が上陸した。この日この上陸作戦を陸上から掩護すべく植松練磨少將は自ら常磐陸戦隊の指揮小隊・第一小隊・装甲自動車二臺・本部工作隊及び本部醫務隊を率ゐて、午前七時五十分、陸戦隊本部を出發した。植松少將は二月五日の午後佐世保に於て上海陸戦隊指揮官に補せらるゝとの公報を受領し、直ちに軍艦龍田に便乗、六日午後四時上海に着任したばかりであつた。

午前九時頃張華濱停車場踏切を西に横切り左折して前進、吳淞クリークを距る約二百米のところ敵の鐵條網に前進を阻止された。二臺の装甲車は鐵條網に行き當つて進むことが出来なくなつたが、前方の獨立家屋を偵察すると、庭前に塹壕を掘り、堅固な陣地を設け若干の敵がこれを守備してゐたので、第一號車に乗つてゐた戦車隊長笹川壽平大尉は、第九號車に在る植松指揮官に、

『あれを射つてもよいですか』

と訊いた。

「よし射て！」

同時に第一號車の二門の機銃が火を噴き、第九號車もこれに續いて猛射を浴びせた。この不意の射撃に敵は大いに狼狽、混亂状態に陥り、一部は斃れ、大部は逃げ出した。しかしなほ数名は頑強に抵抗した。我が射撃開始に次いで、蕪藻濱停車場方面並に楊家屯方面の敵陣地より二臺の装甲車に向つて射弾を集中した。

この時後方部落に展開して、進出の機を待つてゐた常磐陸戦隊は、第一小隊を第一線として攻撃前進に移つた。次いで工作隊は装甲車の位置まで前進、その進出道路を開くべく鐵條網を除去し、濠に橋を架け始めるや、敵は必死となつてこれを妨害した。これがため負傷者續出した。指揮小隊は第一小隊の右翼から道路の兩側に躍進し、第一小隊も躍進、午前九時三十分獨立家屋を占領した。残敵は西隣約十米の氷倉庫に據つて我を射撃したので、この小屋に火を放つて敵を驅逐した。午後零時三十一分鐵道棧橋附近の掃蕩を終へ、同四十分横須賀特別陸戦隊の第十三・第十四中隊は勝野實少佐指揮の下に上陸を開始したが、上陸と同時に戦闘行動に移らなければならなかつた。午後四時には陸軍混成第廿四旅團も上陸した。この頃より朝來の亂

雲益々低く垂れ、遂に雲交りの雨が降り出した。戰場一帯の畑、道路、濕地は泥濘となり、處處に散在する大小のクリークは、折柄の満潮に水嵩を増し、寒氣は酷烈を加へた。部隊は敵彈を顧慮して泥濘に伏し、突撃に際してはクリークを徒渉して進んだ。

八日の戦闘に於て陸戦隊前線各部隊は吳淞クリークの線まで進出し、蕪藻濱停車場・軍工路・橋脚等の敵を撃退したが、午後六時命により全線の正面を陸軍に引繼ぐこととなり、逐次後方に交代して大隊は鐵道・棧橋倉庫附近に集合した。かくして横須賀特別陸戦隊即ち第七大隊は、この夜は倉庫に露營し、翌九日上海に到着、吳淞路の宿舎に入つた。

〔註〕二月八日第三艦隊旗艦出雲が上海に入港したが、當時上海に集つた軍艦は十八隻、驅逐艦卅七隻である。この日上海楊樹浦附近に第一航空戦隊の公大前進基地完成。

二月九日午前十一時半頃、敵は江灣路の我陣地に向つて大規模の逆襲を企てたが、我軍空陸の猛撃に遭つて午後六時百五十の死體を遺棄して西方に退却した（この逆襲に懲りて敵は再び攻勢に出づ。我方は次の總攻撃を準備し、關北前線は相對峙したまゝ約二旬を過した）。

十四日及び十六日には第九師團が上海附近に上陸した。同時作戦に關しては陸戦隊指揮官は第九師團長の指揮下に入ることとなつたが、陸軍はまづ江灣鎮以西の敵に大打撃を與へるのを

刻下の急務とし、吳淞方面には歩兵二ヶ中隊より成る大隊と附屬隊を残して監視せしめ、十八日、陸軍指揮官及び總領事より支那側に對し、『共同租界より約廿軒以外に退却を要求す』

と最後通牒を交付したが支那側がこれを一蹴したので、廿日午前七時半より、陸軍は總攻撃を開始した。

海軍陸戦隊は概ね現陣地を守備し、警戒を嚴にしたが、江灣鎮方面において陸軍の攻撃に壓迫された敵は、開北方面に於て攻撃を採る心算か、廿一日午後六時頃より、我陸戦隊陣地及び北四川路方面に猛烈な射撃を続け、廿二日午後五時過ぎより陸戦隊本部たる北部小學校を目標に砲彈を集注した。また午後九時頃より我が陸戦隊陣地全線に亘つて逆襲して來たが、何れもこれを撃退、敵を一步も近づけなかつた。

二月廿二日から廿六日にかけて海軍航空部隊は杭州・蘇州及び虹橋の敵空軍を攻撃、これを全滅せしめ完全に制空權を握つた。廿八日は歩兵第廿二聯隊が吳淞に上陸した。

八字橋の激闘

敵は開北方面より江灣鎮に到る主要道路の要衝八字橋上を通つて連日彈藥・糧食・防禦材料及び負傷者を運搬せしめてゐた。植松陸戦隊指揮官は、これを占領すれば陸軍正面の作戦に至大の好影響を與へるし、陸軍總攻撃に協同して進出するためには、この敵據點を奪取して置く必要があると決心し、廿八日夜第五大隊長太田實少佐及び第七大隊長勝野實少佐を陸戦隊本部に招致し、八字橋占領に關する作戰命令を與へた。

かくて廿九日早朝、八字橋奪取の陸戦隊命令が下り、各隊は部署に就いた。間もなく數機の攻撃機は、朝陽に銀翼を輝かしつゝ江灣鎮方面より飛來し、午前八時より九時に互り、敵陣地を猛爆した。

午前九時より先づ陸戦隊砲隊は、全力を擧げて敵陣地を砲撃これを制壓した。十時四十七分、右翼水電路の彼方に待機してゐた陸軍の戦車四臺及び海軍の装甲自動車四臺は八字橋に向つて進撃した。四明公所上の重機銃も火を噴いた。この間に太田第五大隊長は本部を四明公所に進め、植松陸戦隊指揮官は午前十時三十分、本部を四明公所屋上に進め、軍艦旗を風に靡かせ乍ら午前十時五十分、攻撃前進を下令した。第五大隊長は、攻撃開始合圖の火箭三發を揚げた。

まづ鹽崎小隊と塚田小隊は泥濘膝を沒する水田を横斷、一時兵力を材木廠内に集結し、鹽崎

小隊は砲彈・銃丸雨の如く飛び手榴彈の炸裂する中を躍進また躍進、午後二時遂に八字橋北東八十米附近に達した。こゝに伏せて前方を窺へば、正面三十米に機銃二門の敵陣があり、これに突撃を試みたが、鐵條網と竹垣に妨げられて進むことが出来ず、右に迂回せんとして鹽崎小隊長及兵二名が倒れ、小隊は敵彈のため身動き一つ出来なかつた。

その時、味方の山砲隊が前面の敵を撃ち始め、その二彈は正確に敵の塹壕内に炸裂し、敵は怖氣づいて西方に退却した。間もなく第一小隊壹岐密中尉が、一ヶ分隊を率ゐて來り、小隊は約三十米退つた所に鞏固なる防禦陣地を作つて、この線を保持した。戰車隊・裝甲車隊は敵陣地前に進出して猛撃を加へ、第八中隊の第三小隊は午前十一時十四分日本人墓地を占領、午後二時塚田小隊は遂に八字橋を占領した。敵は尙も前方の村落に據つて頑強に抵抗し、塚田小隊は相當苦戰に直面した。

この時、工作隊長和田十郎兵曹長は、「決死隊を以て前面の村落を燒打すべし」との命令を受け、七名の決死隊を率ゐて敵陣に突入り、電氣仕掛の地雷導火線を切斷しつゝ敵の占據せる家屋内に侵入して放火した。更に鹽崎小隊は前面にある病院の建物を燒打し、八字橋附近の敵を完全に驅逐、一帯を占領したのであつた。

二月廿二日陸軍は更に第十一師團・第十四師團その他を増派、陸軍大將白川義則を上海派遣軍司令官に任じ、同司令官は廿七日幕僚と共に我軍艦に搭乘、内地を發し、三月一日上海に上陸した。この日第十一師團主力は第四戰隊・第二水雷戰隊及び木曾によつて揚子江を溯航し、海陸飛行隊協力の下に午前七時了口に上陸を開始した。江岸の敵は我發動艇近づくと見るや、機銃を以て極力抵抗したが、我軍は飛行機の煙幕の下より躍り上つて岸に登り、敵を驅逐して要地を攻略、午前八時半までに全部上陸を完了した。上海特別陸戰隊指揮官は改めて陸上作戰に關し白川軍司令官の麾下に屬することとなつた。

陸海共同て吳淞砲臺攻略

三月二日午前二時及び午前五時、開北敵陣地を砲撃したが、敵はこれに應ぜず、退却を開始した形跡なので、午後一時廿分頃、植松陸戰隊指揮官は、

- 一、第五大隊は日本人墓地に集結し、之より三陽路方面に進出、西方に進撃すべし。
- 二、第七大隊は四明公所より八字橋を経て西方に進撃すべし。
- 三、第一・第三大隊は各その陣地より西方に進撃すべし。

と命じ進撃を開始した。そして殆ど敵の抵抗を受けることなく、翌三日午後までには、閘北の西端まで進出した。午後二時第七大隊は、

一、第七大隊は明日吳淞砲臺攻略に従事せしめらるる豫定につき、吳淞宿舍に歸れ。
二、第九・十中隊は第五大隊長の指揮下に入り柳營路方面を守備せよ。

の陸戦隊命令によつて、警備線を第五大隊に引継ぎ、午後十時三十分吳淞宿舍に歸つた。

三日第一水雷戦隊司令官有地十五郎大佐の指揮下に吳淞砲臺の攻撃が行はれた。これに参加した部隊は第一水雷戦隊陸戦隊(二ヶ中隊及び附屬隊)・上海特別陸戦隊第七大隊(三ヶ中隊及び附屬隊)・陸軍歩兵第廿四聯隊二ヶ中隊であり、それに海軍飛行隊、第一水雷戦隊の各艦、山砲隊が協力したのである。

三日明け方、黄浦江の浪を蹴つて、吳淞砲臺水道を驅逐艦阜月に護衛された輸送船四隻が、進んでゐた。その甲板には鐵兜の陸戦隊と陸軍歩兵部隊が一杯乗つてゐた。突然朝の静けさを破つて一發、また一發と銃聲が響いた。次いで飛行機の爆音、我海軍攻撃機の大編隊が低空を掠めて吳淞砲臺上空に殺到し、爆彈の雨を降らせた。百雷一時に落つるが如き爆彈炸裂の音に交つて、砲聲・銃聲入り亂れて黄浦江上を震撼した。敵の防禦砲火は愈々激しく、我輸送船の

前後左右に水柱が奔騰した。金陵丸はあと十數米で棧橋に到着せんとした時敵彈機關室に命中蒸氣は十數丈も噴出し、機械はびつたり止つた。指揮官長崎特務少尉は、

『船長！ 棧橋附近に乗り上げろッ』

と怒號した。船が乗り上ぐるや否や、陸戦隊は時を移さず上陸した。その後を見れば、血は流れ、肉は飛び、臟腑は散亂してゐた。機關長松田一等機關兵と井銅二等機關兵は壯烈な戦死を遂げてゐた。一番乗り第一水雷戦隊陸戦隊はかくして敵前上陸に成功、午前八時、完全に吳淞砲臺を占領し、後れて到着した第七大隊及び陸軍部隊は吳淞鎮部落を占領したのであつた。

三月二日大場鎮・眞茹方面を攻略した陸軍部隊は、三日南翔・吳淞・獅子林方面を攻略し、こゝに江蘇省の一角は全く我軍の占據するところとなり、崑山以東、敵の一影だに認めぬこととなつた。三日午後二時白川陸軍司令官及び野村第三艦隊司令官は各聲明を發し、全軍に對して停戦を命令、海・陸・空三軍共に戈を收めた。

以上の如く、上海事變に至つて我海軍陸戦隊活動は劃期的な飛躍を遂げ、『鐵血陸戦隊』の名が揚り、内外とも、驚異の眼を以つてその威容を仰ぐに至つたのである。この事變は、その

まゝ實戦の訓練であつた。

上海事變勃發するや、米・英は各種の妨害行動乃至は策動を續け、支那側を支援するの態度に出た。彼等は國際聯盟により上海事件調査會を組織、一月三十一日英海軍少將フレミングをして日本軍の租界内撤退を要求し、次いで米・英・佛三國を以て脅迫して停戦せしめんとし、更に聯盟十二理事國は總會決議を以て脅迫、二月廿八日上海に各國代表の圓卓會議を開き種々畫策するところあつた。

日支交渉には米・英が中間に介在して暗躍したため、種々曲折があつたが、五月五日、漸く日支停戦協定五ヶ條が締結された。しかし上述の米・英・佛等の策動は、聽て支那事變を勃發せしめる遠因をなしたのである。

上海事變に鑑み、更に海軍では昭和七年十月一日上海特別陸戦隊司令部を設置し、警備の萬全を期することとなつた。即ち上海事變の勇士が多數居残り實戦の教訓を基礎に各種の研究を行ひ、近代陸軍の兵器を裝備し、艦船訓練をそのまゝに陸戦に活用し、陸軍部隊と何等異なるところのない精強無比の陸戦隊を構成し、臨機應變の活動を行ふこととなつたのである。

〔註〕 昭和七年三月、滿洲國は獨立を宣言し、九月建國の式典が行はれたが、天長節當日、上海新公

園における官民合同祝賀式典式場に一支那人が爆彈を投げ、列席の白川陸軍司令官は間もなく逝去、野村第三艦隊司令長官は隻眼を失ひ、植田第九師團長は右足先端を切断、重光公使は隻脚を失つた。昭和七年三月、横須賀に海軍航空廠が設立された。滿洲事變・上海事變に對し國際聯盟は各種の干渉を試み、リットンを派遣して調査報告書を作成してこの事變を不當に裁斷せんと企圖したが、日本は昭和七年三月廿七日聯盟脱退を通告した。

昭和八年春、日滿兩軍は熱河省を討伐した。同年三月滿洲國新京に駐滿海軍部が設置された。十二月各軍港に警備戰隊が置かれた。聖將東郷平八郎元帥は昭和九年五月三十日薨去された。

昭和十年十二月九日から開かれたロンドン軍縮本會議に於て米英側は華府及ロンドン條約を基礎とし修正を加へた等差比率維持案を強要し來つたが、我方は華府條約破棄の立前を堅持し、遂に翌一月十五日交渉決裂し、軍縮會議脱退を通告した。

無條約時代に對處して、我海軍は對米英劣勢を急速に克服せねばならなかつた。かくして戰術・裝備・訓練の上に於て質量兩面に亘るあらゆる努力が傾注されることになつたが、これらの詳しい事柄についてはこゝでは省略する。

支那事變

滿洲事變を契機として、米・英・ソ等の聯盟・軍縮會議等による對日政治・外交・思想謀略は一應破綻するに至つたので、彼等は、これに代る新たな手段を痛感するに至つた。こゝに於て彼等は支那の對日敵對行動を更に煽り、支那を各自の對日戰前衛部隊として、日本の實力を武力によつて削減せしめんと企てるに至つたのである。

かくして滿洲事變以來、排日抗日運動は全支的となつて行つた。米・英は支那の幣制改革を以て經濟的に國民黨の支配を強化し、ソ聯は西安事件によつて蔣介石を共產黨の軍門に降らしめ、國共合作を實現、着々對日開戦へと誘導して行つた。昭和十二年七月七日、北京を距る西南三里蘆溝橋の北方約千米龍王廟附近に於て、我が豐臺駐屯軍が夜間演習を行つてゐるところを、宋哲元麾下の第廿九軍が、突如我軍に不法發砲して來た。我軍はこれに對し自衛的に應戰するに至つた。これが支那事變の發端である。

海軍では八日支那沿岸警備に當つてゐた第三艦隊司令長官長谷川清中將に對し、警備の萬全を期すべき旨の訓電を發した。我方は極力局地的に解決を圖らんとしたが、既に數年に亘り根強く計畫した對日挑戦であつて、蔣介石側に誠意のあらう筈はない。支那側は十日に至り支那全空軍に動員命令を下し、中央軍四ヶ師を北上せしめ、十二日抗日開戦を決議し、即日中央軍に動員命令を下した。

この結果、十三日北京南郊馬村で日支兩軍の衝突となり、帝國政府も十五日已むなく北支に一部派兵を決した。廿六日廊坊附近の衝突、廿七日北京廣安門の戦ひあり、廿九日遂に冀東保安隊の叛亂により、我が無辜の在留民二百六十名が虐殺されるといふ事件が勃發した。こゝに於て我軍は、斷乎禍根を一掃すべく不法支那軍膺懲の火蓋を切り、廿八日早朝行動を起し、空陸より猛攻撃を開始、忽ち廿九軍を驅逐、京津一帯を確保してしまつた。

蔣介石は北に對しては續々と増援軍を送る一方、上海に於ても着々と抗戰準備を整へるに至つた。特に蔣介石直系の秘密結社藍衣社及び共產黨の使喚による抗日團體が各地に蠢動を開始し、上海の我が居留民の不安は刻々と募るに至つた。

八月九日、南京・漢口の我居留民は上海に總引揚げを行つたが、この日上海には大山事件が

發生した。即ち海軍陸戰隊第一中隊長大山勇夫中尉は、齋藤一等水兵の運轉せる自動車により九日午後五時頃上海共同租界越界路の碑坊路を通行中、多數の支那保安隊に包圍され、機銃・小銃等の射撃を受け、無念にも數十發の彈丸を受けて即死し、瀕死の齋藤一等水兵は何れかに拉致された。

事件發生と共に我總領事館では支那側と折衝を開始し、陸戰隊では午後十時、大山中尉の死體引取りに赴き、同時に全員の非常警戒出動を命じた。岡本上海總領事は十一日上海市長俞鴻鈞に對し、大山事件の擴大を防止する見地から、(一)保安隊の撤退、(二)保安隊の構築せる各種軍事施設の撤回、を要求したが支那側には何等誠意なく、却つて十二日朝來支那保安隊は共同租界と支那街との線上に一齊に防壘を築き、日本人密集地帯たる虹口方面に向つて戦備を固めた。保安隊の中には中央軍の精銳第八十八師が完全な武装の下に参加し、支那街と共同租界との交通は殆ど全部遮斷され、虹口から開北にかけての一帶は大混亂に陥つた。

一、上海陸戰隊遂に應戰

八月十三日午前九時十五分北四川路横濱路附近のアイシス劇場附近に於て我陸戰隊の斥候が支那兵より射撃され、午後四時半頃支那軍は八字橋を爆破し山砲・迫撃砲を以て盛んに我陸戰隊本部方面を砲撃し始めた。こゝに於て大川内陸戰隊司令官は各部隊に對し午後四時十五分戰鬪配備につくべき旨を命じ、陸戰隊は斷乎敵を沈黙せしむべく勇躍配備についた。自警團・在郷軍人團も陸戰隊に協力して活動を開始した。

午後四時廿八分頃、楊樹浦・東華紡績裏手の畑に於いて支那軍の散兵が我が警備兵を攻撃した。夜に入つて虹口一帶の銃砲聲は益々激しさを加へた。敵は虹口クリークの八字橋を先端として南に下り、天通庵驛まで線路傳ひに西に分れ、北停車場から南に下り、租界の境界線たる北四川路一帯に近い陣地を連ねる東に出張り、四軒の廣大な戦線に八十七師(蔣直系の最精銳)・八十八師(師團長張自中)を主力として我に十數倍の大軍を布陣せしめてゐた。夜襲を企ててゐた敵は北四川路上の我軍にジリ／＼と迫らんとしたが、忽ち撃退された。我が陸戰隊の勇猛果敢な應戰によつて午後九時までに敵の猛射を一先づ封じ、同夜は兩軍對峙のまま十四日を迎へた。

十四日午前二時、敵は江灣・八字橋・その他各方面から一齊に攻撃前進を開始したが、待機

中の我陸戦隊は全線に亘り断乎反撃を加へると共に、同二時半、老靶子附近より北停車場一帯の敵に猛撃を開始、戦線は南方に擴大、全市戦線に亘り猛烈な拂曉戦が演ぜられ、四時頃各方面とも激戦となつた。折柄天候は本格的な暴風雨となり、この中で白熱的拂曉戦が展開された。午前二時半第八十七師の一部は開北方面から陸戦隊本部を目指して攻撃、我軍の反撃によつて一旦撃退されたが、再び執拗に逆襲し來つた。かくして前後二時間、陸戦隊本部より海軍武官室は敵の砲撃圏内に入り危険視されたが、新公園方面の支那軍の退却によつて午前六時危険線上より脱した。

二時間餘の激戦により午前六時廿五分商務印書館が火災を起し、八字橋方面の敵は沈黙した。七時頃寶興路方面より敵の小部隊攻撃し來つたが、宮崎部隊が忽ちこれを撃退した。續いて敵は三義里方面より進撃し來つたが、これを北四川路・虹口クリーク・鐵道線路に依つて囲まれた三角地に追ひ込み、十字砲火を浴せて潰滅せしめた。午前七時半頃、北停車場附近の敵は桃山ダンスホール・虬江路・老靶子路にかけて迫撃砲を以て突撃し來つたが、我が猛反撃によつて撃退した。

十四日朝から午後にかけて支那空軍は我が艦船・陸戦隊本部等を狙つて盲爆を繰り返へした

が、悉く目標を外れ、支那避難民や第三國人等を徒に殺傷せしめたに過ぎない。待機中の我空軍はこの盲爆に應戦、敵空軍撃滅に勇躍出動した。

海軍では十四日午後二時、断乎有效手段に出づる旨重大聲明を發表した。この日午後に入つて敵は北四川路・開北方面・その他到る所に火を放つた。これがため火焰濛々と全市を掩ひ、その中を潜つて日支兩軍の凄烈な市街戦が展開され、敵は午後四時を期し一齊に、迫撃砲・野砲の火蓋を切り、敵空軍またこれに呼應して、我陸戦隊本部・武官府を盲爆撃、これに對し我方も一齊に反撃、未曾有の激戦となつた。敵空軍は我空軍によつて撃退、地上砲撃戦も、五時頃から我軍集注砲撃を敢行、敵八十八師の本據、迫撃砲陣地たる北停車場に百發百中の攻撃を行ひ六時頃殆ど沈黙せしめた。この頃敵は八十七師の本據と思はれる眞茹南方から我陣の砲撃を開始した。夜に入つて市政府附近の交戦を皮切りに八字橋・三義里方面に激闘が展開されたが、我陸戦隊の威力の前には齒が立たず、我陣地に一歩も近づくことは出来なかつた。

〔註〕 海軍航空部隊は銀翼を連ね十五日杭州・南昌・南京等を襲ひ空中戦、地上爆破等によつて敵空軍に大損害を與へた。

壯絶極まる立體市街戦

十四日來の敵の猛砲撃は十五日未明に至るも斷續的に續いた。敵は大部隊の掩護の下に上海・吳淞間の鐵道線路を越えて突進し來り、江灣・市政府方面から發射する重砲と共に迫撃砲・機關銃を我陸戦隊に集注して來たが、我軍はこれを反撃沈黙せしめたのであつた。

十六日午前九時から前後三時間に亘り、上海新公園の北方特志大學より八字橋南方一帶の戦線に於て、事變始つて以來最初の壯烈な白兵戦が展開された。この方面の配備を行つてゐたのは故大山大尉の部隊を指揮する貴志部隊長の一隊である。正九時、特志大學北方に突如襲來した約二個旅の支那軍は、貴志部隊に對し野砲・重機關銃の猛射を浴せた。貴志部隊は、『小癩なり』『大山大尉の弔ひ合戦』

とばかり敢然これに應戦、十數倍の敵と銃火を交ふること一時間、多大の損害を與へたが執拗なる支那軍は多勢を頼んで逆襲を繰り返し、我軍は次第に苦戦に陥つた。この時貴志部隊長は怒髮天を衝く有様で、

『大山大尉の弔ひ合戦だ。斬つて、斬つて、斬りまくれ！』

と怒號一番、奮然日本刀を振かざして自ら陣頭に立ち、群がる敵陣に突入、身に十數彈を受け乍ら阿修羅王の如く縱横無盡に斬りまくり、さしもの敵も浮足立つた折柄、飛來した敵彈は部隊長の胸部を貫通、遂に壯烈な戦死を遂げた。部隊長の奮戦に勇氣百倍した我軍は強襲また強襲、目にあまる大軍を潰走せしめ、完全に戦線を占據、防禦陣地を構築した。

北部戦線で敵の決死隊數十回の奇襲を受け、數百倍する大軍と對峙して最も苦戦したのは八字橋の太田部隊である。十六日敵は性懲りもなく夜陰に乘じ數回突撃して來たが、數百の遺棄死體を残し撃退されてしまつた。敵は二日間で陸戦隊本部を占據し、我軍を撃破する豫定であつたと云はれるが、我精強無比の陸戦隊によつて、その企圖は見事に粉碎されてしまつた。

上海市街戦の最前線開北方の菅井部隊は、二十日夜三方を敵に圍まれ、ピラミッド型に突入し我が陣地の最尖端に立つてしまつた。

北停車場に據る敵の精銳は二十日午後から夕刻にかけて、招商局前方面目がけて南下する約三萬の部隊と連絡を取らんとし、我陸戦隊本部及び菅井部隊を孤立に陥れようとする作戦で俄然猛攻撃を開始したが、菅井部隊は五階建の屋内に頑張り、押し寄せる敵を機銃掃射し、全員斬り死を覺悟して激戦、これを死守した。

揚子江敵前上陸

政府は八月十四日上海派兵に決したが、陸軍部隊は艦隊掩護の下に二十三日揚子江岸の羅店鎮方面及び吳淞鎮附近に敵前上陸を敢行したが、この上陸戦の露拂ひ的役割を果したものは、竹下少佐の指揮する海軍陸戦隊の決死隊七十名であつた。

上陸を阻止せんとする敵は、新手の第三十七師及び第七十八師の残兵の混成による數萬の大部隊である。我が軍艦によつて黃浦江岸に達した陸軍部隊は、折柄月落ちた暗黒の敵陣地直前に午前三時四十分頃より上陸を開始したが、これに先立つて、軍艦〇〇に於て待機してゐた陸戦隊竹下決死隊員は、敵前上陸先發隊として艦載艇によつて敵地へ突入した。上陸せんとする岸壁は既に敵弾によつて爆破され盡し、舷側を寄せる術もない。雨霰と落下する敵砲弾は兩沿岸から集注して艇に命中するもの既に數十發、舷側に揚る數十丈の水柱！ 決死遂に岸壁に艇を打ちつけ、二尺幅の板を渡して上陸した。白樺の姿は見る／＼砲火炸裂する闇へ／＼と躍り込んで行つた。もどかしとばかりに中には水中へ飛び込み、崩れ落ちた護岸へ駆け上る兵もあつた。忽ち敵陣から機銃・迫撃砲の集注があり、我が各艦は砲口も焼けよと掩護射撃し、我が

飛行機は敵陣上空を亂舞する。かゝる中を陸軍部隊は次から次と上陸して行つた。午前七時敵の有力據點を占據し、午前八時半豫定部隊全員の上陸を完了した。

竹下陸戦隊は二十二の尊い人柱を出し、陸軍の上陸路を作つて萬全を期したが、敵の頑強な抵抗によつて意外の激戦を繰り返した。棚橋部隊長は重傷を負ひ、下坂少佐は壯烈な戦死を遂げた。上陸部隊は二十四日午後から二十五日朝にかけて海軍艦艇掩護の下に敵陣目かけて一齊に猛烈な攻撃を開始した。二十五日第三艦隊司令長官長谷川中將は支那沿海の一定區域に航行遮斷を実施する旨宣言した。

八月十三日上海戦線の火蓋が切られ、陸軍部隊が上陸する二十三日までの十日間、我が上海特別陸戦隊は寡兵よく數百倍の敵の大軍を支へて、租界内に一步も入れず、或は空襲に息つくひまなき敵の死物狂ひの猛攻撃を反撃し、敵側の、我が増援隊が来るまでに陸戦隊と居留民を鏖殺しにするといふ作戦を、完全に阻んだ。しかも當時の支那軍は昔日の支那軍ではなく、米・英・ソが供給した優秀な武器・飛行機を持つ上に、果敢な闘志と新裝備を誇る近代の軍隊であつた。その大軍が雲霞の如く上海に集中されてゐた。これに對し我が陸戦隊は僅か二十名の兵で一大隊の敵を支へて應戦し、一人の援兵も本部から派遣されないなどといふやうな状況

の下に、戦つて戦つて、戦ひ抜いたのであつた。

〔註〕 陸軍部隊は北支方面で八月廿六日八達嶺を占領し廿七日張家口に入城した。上海では廿八日羅天鎮・殷行鎮を占領、卅一日鷹吳淞隊は吳淞鎮を占據した。この日午前十時、陸軍の一部隊は白晝海軍の協力によつて敵前上陸を敢行した。九月二日の開議で北支事變は支那事變と改稱された。同日陸軍部隊は吳淞砲臺を占據した。三日海軍は厦門を砲撃、陸戦隊は東沙島を占據、五日我艦隊は支那船の全支航行遮断を宣言、わが陸軍部隊は十二日楊行鎮を攻略し、廿七日濟南を占據した。十月一日陸軍部隊は劉家行を占據、八日正定、九日石家莊を占領した。

陸戦隊俄然攻勢へ

八月下旬から十月上旬にかけて、陸軍部隊は上海の敵前衛陣地を次々に攻略して行つたが、それまで守勢にあつた海軍陸戦隊は、十月四日より俄然攻勢に轉じた。北四川路・寶興路方面より敵を虬江路方面に壓迫しつゝあつた陸戦隊佐野部隊は、四日午前十時より行動を起し、寶興路南側地區の燒討ちを決行し、續いて午前八時を期して敵の有力根據地、白保羅路崇徳女學校の總攻撃を敢行した。インド人教會の高橋・宮尾兩部隊は敵に猛烈な銃火を浴せかけ、この掩護射撃の中を原田・近藤・阿部各部隊は白保羅路を敵の猛射を物ともせず突撃、敵は手榴弾を

投げて頑強に抵抗したが、同十時二十分崇徳女學校を占領した。

他方陸戦隊土師部隊は虬江路に敵の地雷を排しつゝ前進し、午前十時半、廣東街前方約百三十米まで進出した。午後北四川路方面の敵は迫撃砲・燒夷彈を以つて我軍を攻撃、桃山ダンスホール・アイシス映畫館附近に數發命中、陸戦隊員に數名の重輕傷者を出したが、我が佐野部隊・土師部隊は相協力して寶興路方面・赫司克而路方面より敵を包圍壓迫、三義里方面の敵有力部隊を猛攻した。

佐野部隊は五日午後零時十二分、當方面の目標たる三義里地區を占據、インド人教會・啓秀女學校・崇徳女學校の陣地と共に敵が頑強に死守する三義里踏切地區陣地へ二十五メートルの地點に達した。この佐野部隊の進撃は開北五萬の敵前線部隊に對する陸戦隊の全面的攻撃據點の確保を意味する。陸戦隊の對敵第一工作はこゝに見事に成功したのだ。佐野部隊は九月二十九日總攻撃を開始して以來七日間、惡戰苦闘、晝夜兼行で攻撃したものであり、上海在住各國武官も、我が用兵の妙と勇敢無比の戰鬪ぶりに舌を巻いて驚いたほどであつた。即ちこの方面は上海一の魔窟として迷路百走し、櫛比せる家といふ家は内側より二重三重に土囊を積み重ね、一軒々々がそのまゝ一堡壘を形成し、更に土囊には針金を家から家へ引張り、その兩端に

は手榴弾をバナナの房の如くに結びつけ、引つかれば直ちに爆發する仕掛となつてゐた。勇猛で鳴る陸戦隊も、一日僅か四、五十米を進撃出来たに過ぎない。全員はすべて決死隊となり、白樺は夜間突撃のもののみが使用した。これがため、宮崎大尉・今井中尉以下戦死傷者多数を出した。

前進據點を得た我が陸戦隊は、十月十三日拂曉より市政府南方の敵に對し攻撃前進を開始、安田部隊は頑強なる敵の防禦陣地を破つて午前八時遠東競馬場を占據し、軍艦旗を翻へした。更に軍工路より猛進撃した陸軍部隊と共に正午頃敵を西方に壓迫し、市政府を確實に占領した。

二十五日陸戦隊と陸軍の谷川部隊と協力して敵の重要據點江灣鎮の總攻撃が行はれた。我陸戦隊の多田野部隊と福永部隊の勝村隊、板谷部隊の山田隊は協力、午前十時、陸軍の谷川部隊と協力して、商科大學の總攻撃を決行、頑強に抵抗する敵と激戦、壯烈な突撃を以て午後六時これを占領した。

二十六日、陸軍部隊の廟行鎮・大場鎮攻略に次いで、二十七日江灣鎮の敵も一齊に退却を開始、陸軍谷川部隊は午前六時完全にこれを占領した。

開北總攻撃、陸戦隊に凱歌

陸戦隊は十月二十七日未明五時を期して開北總攻撃を開始した。各部隊は砲兵の掩護猛撃の下に拂曉の壯烈なる市街戦を展開しつゝ勇躍出動した。午前七時二十分北四川路・老靶子路方面より敵を猛撃した土師部隊は、佐野部隊と南北より協力しつゝ、淞滬鐵道沿線に於て猛烈に反撃する敵と激戦を交へ、敵の死守する最後の一線を突破し、遂に北停車場に突入、これを占領した。

この中部戦線で敵は佐野部隊の前面に反撃を加へて來たが、北部戦線では大場鎮陥落に前後して敵は動搖の色が濃く、我が陸戦隊の攻撃によつて退却した。我軍は退却する敵を一舉に殲滅すべく勇猛果敢な突撃を敢行、我が伊藤部隊は八字橋を越えて水電路を東へ前進、馬場部隊・大西部隊又中山路を西進、江灣路方面にて西に展開する多田野部隊・竹谷部隊・宮田部隊と協力し、江灣鎮方面の敵を壓迫、寶山路を西進した大西部隊は佐野部隊との連撃の下に商務印書館を占領した。

この總攻撃には陸戦隊の砲隊が猛烈な掩護砲撃を續行、海軍航空隊も、敵の退路に痛烈な空

爆を行つた。かくして午前九時には開北の大半を席卷し、上海戦線に於て十八日間頑張り続け最も頑強を極めたポケット地帯の掃蕩は、我陸戦隊の勇戦奮闘によつて完成したのである。尙ほ陸戦隊の右翼多田野部隊は、總攻撃と共に伊藤部隊と相呼應して午前五時四十五分、特志大學を完全に占領した。

北停車場・マーケット附近・上海印刷所、商務印書館等の一帯の敵陣は、何れも地下室を持つた空爆避難所をなし、第一陣・第二陣と豫備を用意してゐた。八字橋から江灣にかけては、塹壕が十重二十重に重つてゐて、針金をつけた地雷・手榴弾が無数にあり、近代市街戦術の典型的陣容をなしてゐたが、陸戦隊の巧妙なる戦闘によつてこれを撃破し去つたのである。

〔註〕十一月二日陸軍の新鋭柳川兵團が海軍協力の下に杭州灣金山衛一帯に奇襲上陸を敢行し、支那軍敗走の重大要因をなした。陸軍部隊は十一日から十二日にかけて、上海市と南翔攻略、十三日上海最後の敵據點の嘉定を占領した。こゝに於て三十萬の大軍を集中して死守を豪語せる上海の敵は完全に敗退するに至つた。十三日更に陸軍の強力なる兵團は海軍の密接なる協力の下に白楊口附近に敵前上陸を行ひ、崑山・太倉の敵を壓迫した。かくして南京攻略戦へと戦局は發展したのである。廿九日には長江最大の關門江陰要塞を攻略した。この間、北支方面では十一月九日太原を攻略、十六日、敵は

重慶を臨時首都とすることなど決定し、南京放棄を準備した。廿日大本營が設置された。

陸戦隊南京入城

上海開北總攻撃以後、陸戦隊は専ら敵敗退後の治安回復に努め南京攻略戦に於ては、華々しい活躍は見られなかつた。南京攻略を目ざす陸軍部隊は破竹の勢を以て諸要地を攻略し、十二月六日南京城に迫り、十日南京總攻撃の火蓋を切り、十三日完全に占領した。

第三艦隊〇〇戦隊は司令官〇〇少將指揮下に揚子江を遡航、地上部隊の猛攻と呼應して南京攻略に向つた。十二月十二日烏龍山砲臺を爆破して、十三日南京に入り、陸上部隊の猛攻によつて狼狽遁走を企てる敵敗殘部隊を攻撃し海軍の南京一番乗りを行ひ、上海・南京間二百五十哩の揚子江啓開が完成された。

十七日の南京入城式には、陸軍部隊と相應じ、海軍部隊は午後一時、長谷川支那方面艦隊司令官・近藤〇〇戦隊司令官・大川内上海特別陸戦隊司令官・並に各幕僚、上海南京駐在武官を先頭に内田特務少尉の指揮する軍樂隊が続き、多田野少佐の指揮する陸戦隊並に海軍〇砲隊は南京の表玄關中山碼頭前の廣場より三十數臺のトラックに分乗して式場に入つた。

〔註〕 陸軍部隊は引續き南京附近の殘敵掃蕩を開始、十二月廿四日江南の敵最後の據點杭州を完全に占領した。

青島に無血上陸

山東の韓復榘は、南京陥落を控へてなほ歸趨を明らかにせ注目されてゐたが、彼の麾下山東軍は、中央の逆宣傳に乗つて、邦人の權益工場等の掠奪破壊を開始、十二月十八日夜、遂に山東の邦人紡績工場十四ヶ所に放火するに至つた。天津司令部では二十三日斷乎山東軍を膺懲する旨聲明、二十三日黄河を渡河せる陸軍部隊は二十六日一氣に濟南城を攻略、引續き山東軍の掃蕩を開始した。

この陸軍作戦に呼應して、我海軍陸戦隊は、昭和十三年一月十日拂曉青島敵前上陸を敢行、午後四時、青島港を占領、更に五時半青島市街に入り、市政府・電信電話局・發電所・膠濟鐵路局・公安局・海關・觀象臺などの主要機關を悉く無事接收した。かくして青島は全く我海軍の手によつて占據されたのであつた。

十二日午前十時より陸軍部隊も青島に續々上陸して部署につき、膠濟鐵道に沿つて東進中で

あつた陸軍部隊も十六日青島に到着し、海陸兩部隊と完全に連絡した。

〔註〕 昭和十三年一月十六日、帝國政府は國民政府を相手とせざる旨聲明を發した。

徐州會戦中の陸戦隊

南京陥落後、蔣介石は、隴海・津浦兩線を結ぶ徐州に軍の主力を集中して對日反攻を呼號するに至つた。我陸軍部隊は昭和十三年下旬、津浦線・京漢線から一路南下すると共に、揚子江北岸から北進行動を開始、徐州包圍態勢を進めた。三日十七日黎明、蘭田少將の指揮する海軍部隊は陸軍部隊の揚子江北岸作戦に協力、その大部隊を嚮導して通州附近に到達し、その揚陸を掩護した。かくして陸軍部隊は三方から破竹の勢ひで徐州に向け進撃、五月十九日午前十時これを占領、敵主力二十四萬を撃滅し去つたのである。

この徐州作戦期間中に海軍陸戦隊は威海衛を占領、厦門島敵前上陸・連雲港占領等に活躍した。威海衛には三月三日夜共產黨系の暴動が発生し市内は大混亂に陥つたので待機中の第〇艦隊の軍艦は荒天風浪を冒し、三月六日威海衛に急行、翌七日午後二時半、林部隊長指揮の陸戦隊は歩武堂々東碼頭より威海衛に無血上陸、直ちに市内各機關を占領、軍艦旗を翻した。四月

三十日支那方面艦隊司令長官に及川中將が親補されたが、同時に上海特別陸戰隊司令官大川内傳七少將・支那方面艦隊參謀長杉山六藏少將・海軍特務部長本田忠雄少將は、それ〴〵新任の陸戰隊司令官穴戸好信少將・特務部長野村直邦少將・艦隊參謀長草鹿任一少將と交代した。海軍陸戰隊は五月十日未明を期し、福建省の廈門島に敵前上陸を敢行、トーチカ壘壕に據つて抵抗する敵を撃破して進撃、十一日正午廈門市内に進出、午後六時全市街並に敵が蟠踞する廈門大學を占領、更に廈門島西南岸白石・胡里山・磐石等の諸砲臺並にその背後地に通れた殘敵を東西より包圍攻撃、同夜、磐石砲臺を占領、十二日午前九時、胡里山砲臺を攻略し、同島の戡定を終へた。

臨海線東端の要港海州一帯の敵は徐州の陥落も知らず、なほも防備を強化せんとしてゐたが、我が有力な海軍陸戰隊は五月二十日午前、艦艇・飛行機掩護の下に海州東方の要點東連島並に連雲港に敵前上陸を敢行し、陣地に據つて抵抗する敵を驅逐し、夕刻までに同地域一帯を占領した。敵は陸戰隊の肉弾に突きまくられ、海州方面に潰走した。

〔註〕 昭和十三年二月下旬上海方面最高指揮官は松井大將に代つて畑俊六大將が親補された。三月廿八日南京に民國維新政府が誕生した。

二、漢口攻略戰

徐州會戰に續いて昭和十三年六月上旬から漢口攻略が展開された。蔣介石は、徐州大敗退を以て戰略的後退と呼號し、武漢周邊に主力を集中したので、これを撃滅すべく、我陸軍は江北と江南から、海軍は江上を遡航、三方包圍態勢を以て進撃を開始した。即ち江北の陸軍部隊は徐州の敗敵を急追して、次々要衝を攻略、漢口目指して進撃を續行すると共に、江南の陸軍部隊は江上進撃の海軍部隊と呼應して一路西進を續けたのである。而して江上海軍部隊の快速進撃は正に劃期的なものがあり、就中海軍陸戰隊の活躍は、上海戰に次ぐ最も華々しく全戰局を發展せしめる上に、非常に重大な役割を果してゐる。

海軍遡江部隊の指揮官は近藤英次郎少將であつた。近藤少將は第一遣外艦隊參謀・鳳翔艦長・館山航空隊司令・赤城・加賀艦長・第三艦隊參謀長を経て、支那事變勃發前は上海特別陸戰隊司令であつた。沈勇果斷、先の南京攻略戰には急速遡江に成功し、長谷川司令長官から感狀を授與された。

海軍特務部は六月十一日、漢口への進攻作戦開始を發表し、湖口附近より蕪湖附近までを作戰區域に指定、第三國艦船の立退きを要望したが、十二日、上海並に杭州灣敵前上陸以來の陸海軍協同作戦による安慶攻略戦の火蓋が切られた。

安慶を占領

六月十一日夜、大王廟附近に假泊した陸軍部隊の大運送團を護衛して一夜を明した海軍部隊は、十二日午前一時より陸戦隊の敵前上陸の準備を完了した。軍艦〇〇乗組の上海特別陸戦隊長の指揮する一隊、及び〇〇に乗組んだ〇〇大尉の指揮する陸戦隊は、降りしきる雨の中に雨具も着けず、鐵兜・白褌をかけ、武装凛々しく數隻の艇に分乗した。闇夜の江上は雨に曇つて一寸先も見えない。嚮導艇の艇尾に點る青いかすかな燈を目標に、兩岸に二手に分れて靜かに遡航した。

大王廟に敵前上陸する〇〇部隊先頭には〇〇大尉が乗込み、〇〇隻の内火艇がこれに續く。安慶城外東南端の飛行場占領の重大任務を負ふ〇〇部隊の他の勇士を乗せた内火艇は、舷側に整然と並び、乗組員の白褌が夜目にも鮮かに浮かぶ。一方陸軍部隊も十一月午後十一時から上陸準備を開始し、鐵舟・ジャンクなどに分乗して午前一時半遡江を開始した。

先頭部隊は六漚の濁流を驅つて午前二時、早くも大王廟と太子磯の兩岸に上陸を開始した。前日まで頑強に機銃・小銃を以て抵抗を續けた敵も、我空軍の猛爆下に潰滅したのか、一發の銃聲も聞えない。やがて夜も白々と明け初める頃、左岸大王廟砲臺附近から銃聲が響く。砲臺守備の敵と上陸部隊との間に火蓋が切られたのであつた。江上の艦艇は一齊に砲門を開き、これに次いで、海軍航空隊が飛來して敵密集部隊を機銃掃射し、間もなく敵陣を制壓した。

海陸兩部隊は大王廟を占領、息つく間もなく安慶目指して西方へと進撃し、午前九時過ぎ白褌決死隊の陸戦隊竹下部隊の一部は陸軍部隊と相前後して安慶に突入し、午前十時これを占領した。

一方太子磯に敵前上陸した陸戦隊岡本部隊は、附近の敵を撃破しつゝ猛進、午前七時四十分頃約三百の敵と交戦、これを撃退、附近部落を占領しつゝ前進、欄江磯附近で陸戦隊員は胸まで水にひたつて、幅五米のクリークを渡河、右翼部隊の一部は潰走する五十數名の敵を殲滅した。全資口砲臺に突入した〇〇少尉の率ゐる部隊は、午前十一時二十七分同砲臺を占領した。安慶對岸の敵陣地を完全に撃滅した〇〇部隊は、更に江を渡り一氣に安慶へ突入せんとした。

が、日没となり、午後五時頃旗艦に凱旋した。

汕頭沖の南澳島に上陸

六月二十一日拂曉、海軍陸戦隊は汕頭沖の南澳島に奇襲敵前上陸を敢行した。虚を衝かれた敵は狼狽を極め、我軍は敵の銃火を排し、疾風迅雷、殘敵掃蕩及び陣地占領を行ひ、二十三日完全に全島攻略を完了して汕頭の咽喉を扼した。

湖口馬當鎮占領

六月十三日安慶攻略を完成した海軍揚子江部隊の一部は、直ちに水路掃海啓開の遡江進撃を開始、二十九日難中の難とされた馬當鎮閉塞線啓開を完了し、下揚子江四百四十哩の制壓を完了したが、海軍陸戦隊及び陸軍部隊は、六月二十三日安慶を進發、連日の悪天候を冒し、江岸の要衝を占領しつゝ前進、七月四日江岸の要衝湖口を占領した。

これより先き六月二十四日、馬當鎮東方隆家口北側の長江南岸に大膽な敵前上陸を敢行し、更に二十六日拂曉武漢三鎮を抑へる堅陣馬當鎮を急襲、東南方に大旋回して背後より敵に迫り、

山を越え、谿を渡り、クリークを涉つて猛撃、海軍航空隊の協力下にこれを占領した。七月九日及川支那方面艦隊司令長官は、湖口よりその上流八十哩を危険區域として第三國の艦船の立退を要求した。

九江の敵前上陸と星子占領

七月二十六日午前八時、漢口防禦陣の中樞要衝は、陸海揚子江進撃部隊によつて占領されたが、この作戦における海軍陸戦隊の活躍は壯烈を極めた。

海軍江上部隊は安慶出發以來、一日一刻の休みもなく揚子江を前進、七月二十五日未明九江下流七哩の張家州に差しかゝるや、前衛部隊として先頭にあつた〇〇艦は〇隻の〇〇を率ゐて九江突入の命を受けた。午前七時準備を完了、同九時濁流を蹴つて一齊に遡江を開始した。軍艦は左右兩岸の大砲の釣瓶打を浴びつゝ午後零時一分九江市の入江に突入した。英國旗の石油倉庫前に差しかゝるや、敵は前後左右から一齊に猛撃したが、我勇士は平然これに應戦、午後一時半、街の中央前面に到着、更に進撃した。午後二時二十五分、我が海鷲が軍事施設を猛爆、〇〇艦は全力を擧げて敵陣を猛射し九江上流町はづれまで進む。敵は總崩れとなり、米英軍艦

の蔭に隠れて逃げ出した。

〇〇艦は尙も猛撃の手をゆるめず、陸戦隊士師部隊長は部下を率ゐて〇隻の小舟に分乗し、上流の敵彈藥庫附近を目標に、敵彈雨飛の中を突進した。しかし岸より一米あたりで生ひ茂る蘆のため一步も前進が不可能となつた。止むなく、岸の鐵條網を切らしめるべく二名の決死隊員を出した。二人は背泳ぎで巧みに進んだ。これを見た艇上の陸戦隊勇士は、『それあの手で行け』と背泳ぎで進み、岸に取つくや傷ける者も一齊に突撃戦に移つた。かくして午後五時二十分敵前上陸は完全に成功し、引續き市内掃蕩戦を展開、二十八日午前八時頃海陸兩部隊によつて九江を占領、同八時三十分、海陸兩軍の先鋒は九江城内に於て感激の握手を交したのであつた。

八月二十日鄱陽湖岸の敵を掃蕩し、武漢防衛の東南方の有力なる據點星子に向つた海陸先鋒部隊は二十一日早朝、海軍陸戦隊は星子南門より突入、陸軍部隊は東門より突入し、午前七時半同市を完全に攻略した。

馬頭鎮と武穴攻略

九月十四日午前十時三十分、海軍陸戦隊士師部隊は、陸軍の永井部隊と協力して、九江西方揚子江南岸の要衝馬頭鎮を占領し、更に十六日早朝海軍陸戦隊續木部隊は、武漢防禦第一線陣地武穴に突入した。武穴は長江中流の最險要地で、田家鎮要塞の咽喉を扼するものだけに、その防備嚴重を極め、機銃・野砲・重砲等の堅固な陣地をもつて圍まれ、宛然要塞群をなしてゐたのであるが、續木部隊は實に二十四時間の激戦を續行して、十七日午前八時三十分武穴城に入城したのであつた。

田家鎮山嶽戦

武穴と共に堅固を誇つた田家鎮攻略戦は宛ら旅順戦を思はせるが如き激戦であつた。群がる山の高さ、赤茶けた山肌までが旅順を偲ばせるものがあつた。武穴・馬頭鎮を奪つた我が海軍陸戦隊は愈々田家鎮攻撃を開始した時、江岸の陸軍部隊の江北今村部隊が田家鎮北方八軒の沙子壩に迫り、江南石本部隊は富池口を奪つて揚子江を挟み、南北挾撃の態勢にあつた。

陸戦隊は東からこれを衝くべく、九月二十五日朝六時半、まづ續木部隊が武穴西側の陽城湖に入り、崔家山麓に敵前上陸を行ひ、十時この山頂の重砲陣地を奪つて、田家鎮要塞群の東端

に軍艦旗を翻へした。

わが陸戦隊は馴れぬ山嶽戦にも屈せず、急な山坡を攀ち登つて、その精銳なる自動火器を縦横に使ひ、同夕大官廟・馬鞍山・大蔡化・小蔡化の各峯を奪つて毛竹林の敵野砲陣地を突破し、二十六日には蘆家嘴から更に登つて蒼谷壩・大老の敵と對峙した。

この日午後二時、土師部隊は武穴上流三杆の地點に白晝の敵前上陸を敢行、沿岸沿ひに進み、こゝに我が陸戦隊は山と堤防の二縦隊に分れて猛進撃を續けた。二十七日敵は最後の抵抗を試み、大老・立見老・陀山・南山の諸陣地からは夜明まで雙方の砲撃が續き、赤く山塊を染めるばかりであつた。

夜が明けると共に、快晴な秋空に我が海の荒鷺が一分の間も置かず猛爆を續けた。我が總攻撃開始と共に、敵陣は總崩れとなつた。山の續木部隊は連榔塘から大老の頂上に出で、田家鎮要塞の東外角の大部分に我が軍艦旗が翻へり、これに呼應して土師部隊は田家鎮砲臺の中の陀山砲臺を抜き、象山の東麓に達した。敵の南岸の半壁山砲臺からは、この時盛んに長砲を放つて來た。しかし本丸の一部を奪はれた敵は他に求める途なく、二十八日田家鎮の大勢は決したのであつた。土師部隊は二十九日午前八時三十分、その最大の堡壘象山を占領、かくて武漢最

大の田家鎮防衛地帯は全く崩壊したのであつた。

高さ二百九十米の象山は旅順包圍線の二〇三高地を彷彿させる天然の要塞であり、長江を隔てて對岸半壁山の堅壘を眼下に望み、西の馮家山砲臺・吳王廟堡壘の自由を奪ふ地點である。この輝かしき土師部隊の戦果は、北側から迫る陸軍部隊と、東部から猛烈な山嶽戦を敢行した陸戦隊續木部隊、富池口を奪つた陸軍永井部隊の協力があつた。海の荒鷺の連日の猛爆、江上艦艇の砲撃があつたからではあるが、陸戦隊の精強を遺憾なく發揮してゐる。かくして武漢攻略戦は劃期的な進展を見ることとなつた。

漢口前面の要塞相次いで攻略

九月二十九日田家鎮前面象山砲臺を陥れた海軍陸戦隊續木・土師兩部隊は、その主力を象山砲臺山麓に集結、對岸半壁山砲臺を一舉に葬らんと待機しつゝあつたが、十月四日未明突如行動を開始した。曉闇を衝いて田家鎮下流方面より果敢な江上敵前渡渉を行ひ、江岸沿ひに進撃した陸軍部隊の一部と相呼應し、海の荒鷺並に江上艦隊の掩護射撃の下に江岸沿ひに銃砲火の雨を肩し、隼の如く進撃、午前九時十分遂にこれを抜き、早朝江上に感激の軍艦旗を掲げ、九

江上流遡航作戰中最難關とされた半壁山要塞を完全に攻略した。

四日半壁山占領後逃亡する敗敵を追つて更に猛進撃を敢行、半壁山西方江岸の高地馬鞍山の攻撃を開始した。即ち勇猛果敢を以つて鳴る我が陸戦隊土師部隊・續木部隊の勇士は五日拂曉とともに大行動を起し、海軍機の協力の下に敵の抵抗を排除しつゝ、僅かの隘路を驀進、猛射を浴せ、再び峻嶒な山肌を這ひつゝ敵陣に突入、手榴弾を以て應戦する敵を片ツ端から芋刺しにしつゝ突撃を繰返し、遂に正午山頂を奪取、西方に潰走する敵部隊に機銃を浴せてこれを殲滅、完全に馬鞍山を占領した。

馬鞍山敗走の敵は、斬春對岸方面の山嶽に遁入したので、陸戦隊續木部隊は、尙ほも追撃戦を續行、十日拂曉艦砲の掩護の下に突撃戦を以て劉家灣の敵堡壘を奪取し、次いで江岸に屹立する二〇一高地火山に對し總攻撃の火蓋を切つた。秋とはいへ、百度を越える暑さの中に全山岩石と灌木に包まれた火山の堅壁に迫る陸戦隊勇士の辛苦は、並大抵のものではなかつた。正確無比の艦砲と荒鷲の爆撃に勇を鼓し、峻嶒を攀ち登り、支那軍得意の手榴弾攻撃に白兵戦を以て戦ひ、死闘十餘時間の後、午後五時十分、火山最高峰を占領し、山頂に軍艦旗を掲げた。この壯烈なる火山攻略戦において撃破した堡壘は百五十を超え、遺棄された敵死體は五百を突

破した。更に續木・土師兩部隊は十一日斬春を中心とする兩岸の敵壘を一舉に粉碎して、斬春水道を完全に確保した。

十月十六日、海軍陸戦隊は、前日石灰窰下流四軒の楊五山を征服した陸軍部隊と協力、早曉から石灰窰の總攻撃を開始し、午後三時半これを占領した。この日陸戦隊の他の一隊は午後一時半大冶鋼鐵廠外れの童子堡の貯炭場附近に敵前上陸を敢行し、鎔鑛爐の中心地に突撃、廠内の敵を掃蕩して、二時鎔鑛爐の高き鐵塔に軍艦旗を翻へした。

十九日黄石港附近にあつて頑強に抵抗しつゝあつた敵は、我揚子江部隊の果敢なる進撃と陸戦隊の急迫、海鷲の猛爆に堪へかねて敗退、午後四時十分、我が陸戦隊は完全に黄石港を占領、二十二日早曉海軍陸戦隊は陸軍部隊と協力、鄂城下流某地點に敵前上陸を執行し、午後零時、その先頭は鄂城に突入、零時半これを攻略した。かくして我海軍部隊は江上を破竹の勢を以て驀進し、十月二十四日には武漢を距る十一里の地點に肉薄し、武漢突入の態勢を整へたのであつた。

武漢に入城

破竹の勢ひで江北を進撃中の陸軍部隊は、十月二十五日京漢線を遮断して漢口・信陽間の敵退路を断ち、漢口へ三里の半橋口に進入し怒濤の如く進撃したが、揚子江進撃の海陸軍部隊は同日午後四時半漢口の一角に突入、午後五時漢口市總攻撃の火蓋が切られた。

二十六日午前五時揚子江南岸部隊は、武昌に突入した。漢口突入部隊は着々掃蕩の歩を進め二十六日午後三時半日本租界を完全に確保した。この日午後秋雨煙る中を近藤司令官の指揮する我が江上艦隊の全艦艇は堂々たる威容をつらねて漢口江上に進入した。かくして九江出航以來六十五日の悪戦苦闘を続け、上海から漢口に到る蜿蜒六百哩の揚子江を完全に制壓したわけである。漢口進入の各艦艇は更に武昌前面に進出し、陸戦隊は附近の殘敵掃蕩を續行した。

二十七日午後三時四十分、江南進撃の陸軍高品部隊は海軍協力の下に揚子江を渡つて漢陽を占領、こゝに武漢三鎮は完全に我が手中に歸した。この作戰に於て敵の死傷三十五萬以上と推定され、約百三十師八十萬の敵は支離滅裂となり敗走したが、海軍陸戦隊の果した役割は絶大なものがある。我軍は引續き武漢周邊に追撃戦を展開したが、海軍遼江部隊は十一月五日以來、揚子江兩岸の敵を制壓しつゝ果敢な進撃を続け、隨所に機雷原を突破し、六日、漢口を距る數十哩の地點、寶塔州に達して更に遼江、陸戦隊の一部は八日午後三時四十分、陸軍部隊と

協力して新堤市内を掃蕩した。十三日遼江部隊は岳州に突入し、長江八百里の制壓を完成、陸上進撃の陸軍部隊と連絡した。

〔註〕 漢口攻略戦展開中の七月十二日、ソ聯兵の滿洲國侵入による張鼓峯事件が起つた。卅一日ソ聯兵を撃退し、十日ソ停戦協定が成立したが、これは漢口作戰の牽制と目された。

三、廣東攻略戦

漢口へ、漢口へ、と我海陸空軍が猛進撃しつゝあつた昭和十三年十月十二日未明、我海陸軍の精銳部隊は、緊密なる協力の下に、廣東省のバイアス灣に奇襲上陸を敢行し、漢口死守を豪語する蔣政權の南方輸血路を痛打した。上陸部隊は同日夕刻迄に海岸線より二十軒の奥地に進出、十三日正午淡水南北の線に達した。

更に海軍陸戦隊は十三日、バイアス灣西部の亞鈴灣北岸及び同灣南岸の排牙山砲臺に上陸して忽ちこれを占領、敵を掃蕩し、野砲・彈藥多數を捕獲した。

その後、上陸部隊は十五日惠州、十六日博羅縣城を陥し、廣九鐵道を遮断、二十一日午後三

時廣東市に入城した。敵廣東軍の總師余漢謀は、勝算なしと見極め同日我軍に投降した。

二十二日海陸軍の精銳部隊は珠江江口に進入し、夕刻大角島を掃蕩、虎門砲臺の對岸を占領したが、二十三日早朝より虎門砲臺の攻撃を開始、海軍艦艇・海鷲の猛烈なる砲爆撃による掩護の下に、陸軍部隊は亞娘鞋島砲臺に、海軍陸戦隊は川鼻角砲臺に、それ／＼上陸を斷行し、頑強なる敵の抵抗を排除して午後五時虎門全砲臺を占領したのであつた。

この攻略戦に當つては海軍最高指揮官鹽澤幸一中將は將旗を軍艦〇〇に移し、自ら陣頭に立つた。虎門砲臺は珠江本流の入口、川鼻島・大角島・亞娘鞋島・横梢島の四島に築かれた堅固な砲臺十七を持つ近代的要塞であり、監視所その他の設備もあり、廣東防備の最重要陣地である。遡江艦隊は旗艦を中心にして悠々これに近づき、四陣を作り、まづ要塞中最も強力な川鼻砲臺に對し砲火を集中した。

我が的確な猛射は敵陣地を次々と爆破、血煙は全島を蔽つたが、敵は少しも反撃しない。ここにおいて旗艦は一時砲撃を中止せしめ、驅逐艦をして砲臺前面に近づかせ、彼の反撃に誘ひの手を向けた。驅逐艦が砲臺間近に迫り、有效射程内に入つたと見るや、俄然猛砲撃を始めた。これによつて敵の所在が暴露され、艦隊は敵の砲臺目掛けて一齊射撃を開始、二十三日午前十

一時遂にこれを沈黙せしめ、陸戦隊は一齊に敵前上陸を敢行し、敵を殲滅したのであつた。陸戦隊は更に二十五日珠江遡江部隊と協力し蓮花砲臺を攻略、續いて菱塘獨に據る敵約一個中隊を撃破して、これを占領した。二十九日遡江部隊の精銳は水路から廣東一番乗りを行つた。かくして廣東作戦は一段落したが、海軍南支派遣部隊は昭和十四年一月三日を期して珠江西岸の大三角洲地帯に蟠踞する殘敵の大掃蕩戦を開始した。

一月四日未明に大森隊長の指揮する陸戦隊は廣東の下流約三十里、珠江に注ぐ大クリーク沙灣水道に決死的遡江を執行し、陸軍部隊を沙灣附近に敵前上陸せしめた。同九時、沙灣水道内に横たはる大小幾多の三角洲上に於て頑強に抵抗する殘敵掃蕩戦の火蓋を切つた。敵はジャンク數隻をクリークに横たへ、その影のバナナ畑に壕を掘り、全然姿を見せずチエコ機銃の猛射を浴せた。彈雨の中を大森隊長以下陸戦隊の精銳は、敵前百米に舟を停めて應戦、敵がひるむ隙を狙ひ、これに近づいてジャンク五隻に火を放つた。かくて敵に猶豫を與へず正午直ちに各洲に敵前上陸を敢行、一島々々風潰しに掃蕩を行ひ、五時半敵に殲滅的大打撃を與へて撃退した。陸戦隊は息つく暇もなく四日午後十一時半暗夜を利用して更に珠江西岸石樓郷に敵前上陸を敢行し、約十分間で同地を始め背後二百米の丘陵を占領した。

五日午前八時を期し雨中に行動を開始し、潭山・明經・仙嶺と三角洲地帯の主要村落を抜いて北進、遠い山越しに前進する陸軍と連絡しつゝ、午後五時化龍村に於て海陸兩部隊は感激の握手を交し珠江三角洲地帯の完全掃蕩を完了した。

四月十四日珠江部隊に属する海軍陸戦隊八角部隊は陸軍岡本部隊と協力、江上艦艇と緊密な聯繫の下に漂州（廣東南方二十マイル）附近の三角地帯に、最も不利と思はれる午後三時を選んで奇襲上陸を敢行した。各艦艇からの掩護射撃に敵は戦意を喪失して逸早く潰走、午後四時二十分、漂州市街を完全に掃蕩した。

四、海南島攻略戦

廣東攻略戦に引続き、昭和十四年二月十日未明を期し、海陸軍は海南島攻略戦の火蓋を切つた。近藤信竹中將の率ゐる南支海軍部隊、並にこれと協同する陸軍部隊を搭載した輸送船團は、艦隊の緊密な嚮導掩護の下に九日夜海南島北岸に達し、揚陸部隊は直ちに上陸を開始、午前三時、奇襲上陸に成功したのであつた。

艦隊主力は十日午前七時、陸の進撃に並行して進行、海口港の西方秀英砲臺攻略を開始した。旗艦以下海の艦艇は堂々と進航、海鷲また敵砲臺を目ざして翔けて行く。かくして海空呼應の砲爆撃が展開された。我が猛攻に對し敵は小癢にも反撃したが、交戦約一時間で敵は全く沈黙した。

折から待機中の陸戦隊は〇〇艦〇〇隻に分乗して海より海口突入を開始した。この時、日の丸を掲げた陸の尖兵は海口市に向つて進撃中であつた。遡江部隊はこれに後れじと水路を急いだ。正午市街に上陸、陸軍と連絡し、完全にこれを占領した。

十一日中瀬陸戦隊は澄邁灣の對岸に果敢なる敵前上陸を敢行した。即ち中瀬部隊は十一日未明銀星を浴びて軍艦から鐵舟に乗り込み、軍艦旗を押し立て、進撃を開始した。南支特有の濃霧が立籠めて三十米先は全く見えない。しかも波は狂ひ、鐵舟は木の葉のやうに翻弄される。陸戦隊勇士はこれを物ともせず懸命に進撃、午前七時半盲目航行は成功して、目的の澄邁灣に乗りつけ、軍艦旗を先頭に上陸したが、敵影は一つも見えなかつた。約一時間ほど進撃した頃、椰子の木蔭から小銃を射つて來て交戦となつたが、僅か二十分で敵は敗走し、九時二十分敵の重要據點を占領した。

南進する陸軍部隊に策應して、海軍陸戦隊は十四日未明海南島南部の三亞港に敵前上陸を行った。太田(實)部隊は敗敵を壓迫しつゝ西進、午前六時四十五分保安隊員を含む少數の敵を撃破して三亞街を占領、部落内を掃蕩後更に西進、井上部隊と共に正午、榆林方面を占領した。十四日三亞港の最左翼より一路西進、崖縣(敵司令部所左地)に向つて進撃した富山・大島兩部隊は熱砂を長驅し、若干の敵抵抗を排し、同日午後十一時城内に突入、中瀬部隊も十五日午前零時入城し、相協力して零時半市内の掃蕩を終へ完全に攻略した。中瀬部隊は十五日崖縣の警備を特別陸戦隊加藤隊に委ね、それ／＼原艦船に歸還した。

四月十六日午前九時、太田部隊長の率ゐる海軍陸戦隊は、陸軍の東部要地嘉積攻略に協力し、折柄の細雨を衝いて、東岸の要港博鰲港に敵前上陸し、西方十二軒を驀進して、樂會に入城、陸軍部隊と握手した。また板垣部隊長の率ゐる海軍陸戦隊は陸軍部隊と協力し、同日西海岸の要衝新英港を急襲、午前十一時二十分、白馬井洋浦から白晝の敵前上陸を行ひ、正午過ぎこれを占領し、引續き十八日未明、闇を衝いて行動を開始し儋縣城を目ざして進撃、豪雨の中を勇士は全身すぶぬれとなつて泥濘の悪路を進撃し、敵保安本部王五市を急襲、更に歴還を陥れ、陸軍川崎部隊と共に三方から儋縣城を包圍し、午前十時これを占領した。

五月六日午前海軍陸戦隊は西岸の要衝黃流市を無血占領した。かくして海南島の主要作戦は一段落となつたが、海軍陸戦隊は尙ほ殘敵掃蕩戦を續行して、島内の治安回復に努めた。

五、海州攻略戦

海南島攻略戦展開中、北支・中支に於いても、大小の殘敵掃蕩戦が展開された。徐州大會戦で四分五裂となつた殘敵約六萬は、山東省南部及び江蘇省北部に逃げ込み蠢動を續けてゐたが、我が北支軍は、昭和十四年二月二十六日、山東省南端安東衛及び北部江蘇省灌河口に敵前奇襲上陸を敢行、三月四日敵の最大據點海州城を占領して敵を掃蕩した。この作戦に於ても海軍部隊(陸戦隊を含む)は緊密に協力した。臨洪江遡江部隊は、折柄の悪天候と山なす怒濤と闘ひつゝ兩岸の敵を蹴散らし、大浦・新浦を占領して、三月四日陸上部隊と共に海州に入城した。

六、鄱陽湖制壓

三月十三日、海陸協同して鄱陽湖戡定作戦が展開された。即ち海軍湖上部隊は同日未明陸軍志摩部隊を掩護して、星子對岸屏風山附近一帯を粉碎し、これを皮切りとして、敵があらゆる秘策を傾けて防禦する大鄱陽湖の謎の水路を切開きつゝ、南を指して驀らに進撃した。伍賀總指揮隊長の下に大小艦艇・舟艇を連ねた佐土原・有賀隊・中川陸戦隊・海の荒鷲、それに陸軍青海川・島兩部隊が側面から協力して十八日午前九時、既に鄱陽湖を縦断し盡して目ざす吳城まで僅か四杆の地點に迫つた。午後三時三十分、旗艦のマストから信號ラツパが鳴り響き、艦列の後尾に待機中の陸戦隊中川部隊に對し、『即時上陸用意』の信號が掲げられた。陸戦隊は決死の意氣に燃えて忽ち鐵舟に乗り移り、蔡村高地前面に突進、隊員は敵の掃射を浴びつゝ、濕つたクリークの土堤に腹這ひになつて上陸を開始した。この陸戦隊の上陸に次いで、陸軍青海川部隊も多數の鐵舟に分乗して吳城以南修水河口附近に上陸を敢行した。

海軍陸戦隊が上陸した蔡村高地では、壯烈鬼神を哭かしむる肉彈戰が展開された。前方二千米のクリークに舟を進めるや、敵彈は恰も礫のやうにクリークの水に飛び跳ねる。舟から身を投げ出したまゝ身動き一つ出来ない。前面は一寸の遮蔽物もない沼地である。陸戦隊員は泥の散兵線に、やもりのやうに吸ひついたまゝ曉を待つた。敵彈は絶え間なく吼えつづけてゐる。

十九日午前六時、中川部隊長は、瞬間を狙つて荒獅子のやうに叱咤した。
『肉彈突撃！』

すでに誰もが一つの火となつてゐた。膝まで没する泥沼を泳いで肉彈突撃を敢行し、蔡村高地を占領したのだつた。二十三日午前十時半、中川陸戦隊は更に磯野・佐土原・本川各陸戦隊と協力、敵の猛烈なる銃砲彈を冒しつゝ、吳城東方の敵正面に上陸、果敢な猛進撃を続け、午後一時三十分吳城を占領、鄱陽湖西岸を完全に制壓し南昌防衛第二線を蹂躪し去つたのであつた。

三月二十一日午前六時三十分、陸軍の田村・大河原・伊藤・高原の各部隊は錢塘江（杭州灣）南岸に敵前上陸を行ひ、劉建緒指揮下の約二個師と王紹維の自衛團約五千に鐵槌を下したが、この作戦にも海軍部隊は緊密に協力した。また同月二十日より江西省の要衝南昌攻略戦が展開された。南昌は第三戰區の最重要據點であり、敵はここに十數個師・數萬の大軍を配備してゐたが、陸軍部隊は破竹の猛進撃を続け、同二十八日正午これを占領した。吳城攻略後の海軍部隊もこの作戦に協力、江上部隊は、吳城・南昌間の贛江閉塞船啓開作業に従事すると共に、中川陸戦隊は陸路贛江沿岸の殘敵掃蕩を行ひつゝ進撃、四月四日午後三時半週江前衛部隊と並進して堂々南昌に入城、市内を大行進して、同四時半南昌飛行場に到達し、この地に散華した空の

勇士南郷少佐を偲び新たな感激に浸つた。

七、汕頭攻略戦

昭和十四年六月二十一日拂曉を期して我海陸軍の精銳部隊は蔣政權後方ルートたる汕頭附近に敵前上陸を敢行し、破竹の勢ひを以て進撃、同日午後二時五十分完全に汕頭を占領したが、海軍精銳陸戦隊も出陣した。

二十一日午前二時、燈火管制下の〇〇船に英氣を養つてゐた特別陸戦隊副田部隊全員は、早くも起床し出陣準備を開始した。やがて鐵兜・白禱に戦闘裝備も凛々しく小舟に乗り組んだ。午前四時過ぎ船は西へ向つて一齊に進發し、副田部隊の勇士は、幾多の戦闘や敵前上陸に殊勳を立てた戰場馴れのした古強者が多く、海の新撰組といはれてゐた。一行は汕頭の關門をなす要衝嶼を目ざして進撃した。午前五時十七分、敵が著眼したと思ふ間もなく、副田隊長の上陸命令が下り、乗組員は一齊に砂濱に躍り込み、上陸した。副田部隊は兩部隊に分れ、林田隊は部落の肅清に向つたが、忽ち北岸から敵が射撃したので我方もこれに應戦撃退した。宮内隊

は海岸地帯を始め機雷その他の障碍物の捜査發見に努め、かくて半時間で同島を完全に占領した。宮内隊は更に東方の鹿嶼に上陸、燈臺その他を壓へ、午前七時全島を肅清、また他の一部隊は西方の山島を占領し、こゝに汕頭前面の咽喉部は完全に我が手中に歸した。一方陸軍部隊の一部は汕頭對岸の達濠洲、また他の一隊は海軍の嶼嶼上陸とほぼ同時に韓江河口兩岸無名島突角に上陸、陸軍主力部隊は鐵舟で韓江を遡江し、西岸のトーチカ陣地よりの敵の猛射の中を汕頭北方より上陸し、二十一日午前十一時早くも汕頭市内海岸通りに突入一番乗りを行つた。陸戦隊副田部隊は二十二日午前五時海軍先遣部隊として海上よりする最初の汕頭入りを決行、直ちに海關・招商局の碼頭その他を占領し、同午前十時過ぎ海岸地區の掃蕩を完了した。

二十一日夜、我が砲撃により焦土と化した汕頭敵陣地に炎々と燃え盛る火の手を眺め、嶼嶼に腕を撫してゐた副田陸戦隊の一部は、東部隊長指揮の下に二十二日午前七時半陸軍と協力して、汕頭對岸角石碼頭に無血上陸を行ひ、殘敵掃蕩を行つた。かくして汕頭攻略戦は一段落を告げた譯である。

八、舟山列島に敵前上陸

汕頭攻略戦に續いて六月二十三日早朝、支那沿岸の封鎖に従事中的海軍部隊は舟山島南部に陸戦隊を揚陸、揚子江及び杭州灣口を抑へる舟山列島攻略戦を開始した。

二十三日午前五時、陸戦隊松尾部隊は舟山島定海西方二里の海岸に敵前上陸を敢行し、膝を没するばかりの泥濘を衝いて前進するや、一面の水田の間を縫つて敵のチエコ機銃が鳴り響いた。松尾部隊の勇士は飛び来る弾丸を尻目に堂々進撃を續け、午前八時定海西方の無名高地を占領した。敵兵は城壁に沿ふクリーク附近から北方の山嶽陣地に布陣し抵抗を試みたが、海荒鷲が敵陣の上を亂舞、海上軍艦の巨砲と陸戦隊砲隊また一齊に砲撃を開始、激闘一時間にして敵を撃退した。

一方定海南方の大道碼頭に上陸した陸戦隊笹川部隊は、午前十時半早くも装甲車を先頭に定海南門に突入、更に別働隊は十一時十分北門に突入、工作隊の懸けた梯子によつて城内に殺到し、午後には主力部隊は軍艦旗を先頭に正門より入城、午後三時過ぎ舟山列島の縣城定海は

陸戦隊の手に歸したのである。なほ有賀部隊は二十三日夜半舟山島東端の要衝沈家門の市街を急襲して夜明けまでにこれを占領、舟山島は陸戦隊の單獨作戰によつて、急速に完了したのである。

〔註〕 昭和十四年四月敵は四月攻勢を誇號し來つたが、下旬までに中・北支ともに完全に粉碎した。敵の遺棄死體二萬二千餘、五月十一日ノモンハン事件勃發、ソ蒙軍の不法越境に端を發し日ソ兩軍が交戦した。六月十四日天津英租界の隔絶を斷行した。七月十五日、日英會談を開始、九月一日蒙古自治政府成立、徳王が主席に就任した。三日英・佛が對獨宣戰布告を行つた。四日帝國政府は歐洲戰爭不介入の旨聲明した。十二日支那派遣軍總司令部編成、十六日ノモンハン事件の停戰協定が成立した。

九、その後の陸戦隊活動

舟山列島の攻略戦以後、海陸軍とも大規模作戰は一段落となり、陸戦隊の活動も甚だ地味となつた。従つて以下その活動の概要を記すに止め大東亞戦へ筆を進めたい。

昭和十四年十月三日、海軍部隊は福建南方古鼈頭に新作戰を展開し、忽ちの中にこれを完了し

た。また十一月十五日、海陸軍部隊は緊密なる協力の下に廣東省北海附近に奇襲上陸を敢行して北海を占領したが、これが舟山列島攻略後、昭和十四年度において陸戦隊が活動した主なる作戦である。昭和十五年に入るや、二月上旬、陸軍の魯東作戦（山東半島掃蕩戦）に協力して海軍陸戦隊は大いに奮戦、治安肅正に寄與した。六月以降も同様作戦に協力した。

海南島部隊は三月上旬から陸戦隊を増強し、陸軍の協力を得て、徹底的に島内掃蕩戦を開始し、忽ち全島を席卷、主要部落は悉く我が掌中に收め、海南島明朗化を實現した。

揚子江海軍部隊は江口より岳州に到る蜿蜒八百餘裡にわたる江上を始め、大小幾多の支流・湖上を制壓し、或は江岸に來襲する敵を掃蕩すると共に、陸戦隊は随時上陸して、敵匪の根據を衝いた。六月以降は洞庭湖・君山方面の敵地を制壓し、更に漢水・高郵湖等における陸軍部隊の掃蕩戦に協力、七月十一日陸戦隊は漢口上流九十マイルの溪口奥地に上陸して敵匪掃蕩を行つたが、十六日には他の海軍陸戦隊は、杭州灣方面に上陸して七里嶼・黃蟬山を占領した。

南支方面に活躍の海軍部隊は同日泉州を急襲、陸戦隊は深滬灣に敵前上陸を敢行して附近一帯を掃蕩、十八日は福建省の援蔣據點三都澳を完全に占領、二十七日には汕尾の媽宮を占領、珠江部隊は牛角山島及び大淋島などを攻略して、大いに珠江の治安肅正の成果をあげた。

山東半島方面において、陸戦隊は六月以降も陸軍の殘敵掃蕩に協力したが、山東・江蘇沿岸及び射陽湖・漣河々岸を哨戒中の艦艇部隊は、ジャンクによる密輸を嚴戒すると共に、陸戦隊は榮城・萊州・石灰嘴・三山・石島其他の沿岸各地に蠢動する敵遊撃隊及び共產匪を討伐した。

十月四日、陸戦隊は雷州半島に敵前上陸を行ひ、これを制壓した。

昭和十六年一月初旬舟山島の匪賊が十五年末から蠢動の兆を示したので、有力陸戦隊が上陸して、島内を掃蕩した。揚子江沿岸に於ても、各艦艇は引續き、直接砲撃により或は陸戦隊を揚陸して沿岸各地の肅清を續行した。青島方面に活躍の海軍陸戦隊は、二月上旬青島北東地區に出撃して匪賊掃蕩を行ひ、威海衛では大隊長以下約五百名の遊撃匪を歸順せしめた。二月四日陸軍は南支惠州東南に奇襲上陸し香韶ルートを遮断したが、南支海軍部隊の陸戦隊精銳もこれに協力奮戦した。

二月十四日のバイアス灣西方の紅海灣の上陸に際しても海軍部隊は緊密に協力した。海南島に於ては陸戦隊は二月下旬より三月にかけて更に全島的な一齊討伐を開始し、北部山間地區に蟠踞してゐた敵を掃蕩した。四月十九日未明海陸軍共同して、浙江省沿岸の各要衝及び福建省閩江口附近に一齊奇襲上陸を行ひ、陸戦隊は、陸軍部隊と共に鎮海城に突入した。また福州方

面においても陸戦隊は閩江口の甌斗島に上陸、同地一帯を掃蕩して警戒艇海鷹（三百トン）を鹵獲し、更に水路啓開隊と共に閩江の閉塞線を突破して上流の敵海軍根據地馬尾に突入これを占領した。四月二十五日陸戦隊は更に浙江省の要衝柴橋・松門に奇襲上陸し、この方面の密輸路を完全に遮断した。

五月上旬、陸戦隊は寧波附近敵密輸地點を掃蕩したが、十二日行はれた南支陸軍部隊の惠州攻略戦には東江を遡江し、陸軍部隊と共に惠陽に入城した。六月北支方面では、石島附近及び蓮雲港附近の敵並に北雲臺山南方の高公島に蠢動する敵を撃破し、揚子江においては陸戦隊は各所に上陸して陸軍部隊と協力、殘敵掃蕩に努めた。

七月四日未明陸戦隊は陸軍部隊と協力、汕頭東北約六十軒の沿岸一帯に敵前上陸を行ひ、柘林灣を奇襲し、抗日援蔣物資を完封した。更に黃崗城に突入、詔安（福建・廣東の省境）に進出、七日仙州（黃崗西方十軒）附近の敵を撃破し、敗走の敵を追つて北進、鷓鴣山の敵を蹴散らし八日未明韓江下流澄海灣の援蔣據點樟林を占領した。海南島の陸戦隊は七月一日より十日までの間に約三十回出撃し敵五百を掃蕩、また十一日より三十日まで陸戦隊は北支で五回、揚子江流域で十五回、海南島で二十九回出撃したが、八月中旬有力陸戦隊は、洞庭湖北岸に突入して

同地一帯を掃蕩、敵の重要輸血路を粉碎した。

また八月上旬、海南島の陸戦隊は一齊に行動を起し、旬日にして敵の本據南問市を占領したが、敵屍千七百二十九に達した。八月二十一日より三十一日まで、揚子江流域十一ヶ所に陸戦隊が上陸、沿岸の殘敵を掃蕩、また舟山島では沈家門北方の敵匪を掃蕩、福州方面では二十六日宮井洋及び三都澳を掃蕩、北支方面の陸戦隊は九月七日山東半島北部、温泉城西南方に於て移動中の敵匪三百を捕捉殲滅した。連雲港方面では九日・十日の兩日同港北方雲臺山南麓に上陸、附近一帯を掃蕩した。以上は何れも局部的掃蕩戦の域を出てゐない小規模な戦闘であつたが、九月十七日を期して行はれた。湖南大作戦には陸戦隊は目覺しい活躍を行つた。

一〇、湖南大作戦

十六年九月十七日、海陸軍協同の下に、中支攪亂の據點となつてゐた敵第九戰區覆滅の湖南大作戦の火蓋が切られた。海軍揚子江部隊は十七日夜半行動を起し、洞庭湖を横斷、土井部隊長の率ゐる毛利・東・布施・森本・辻村・松永・近藤・渡邊等の陸戦隊は、陸軍の平野部隊を

掩護し、浮流機雷を處分しつゝ南下、十八日午前四時五十分、艦艇掩護の下に敵の抵抗を排除し、陸軍部隊を南岸第一線に揚陸した。次いで午前八時、第二陣が上陸した。

一方久保部隊長の率ある田中・平野・信岡・小島・小林の各陸戦隊は同日午前七時二十分、他の一角に上陸、忽ち附近一帯を占領して敵を南方に追撃すれば、清水・篠原・田村・中原・廣中の聯合陸戦隊は十八日拂曉、幅五十米の新橋河を渡渉し、洞庭湖東岸に沿うて進撃、同日午前九時新橋を占領した。十九日敵を汨水河畔に追ひつめて陸海協力して殲滅戦を展開した。陸戦隊の清水部隊は早瀬・村井・渡邊・林各部隊と協力、各艦艇は一齊に砲門を開き陸戦隊・陸軍部隊は各所に敵前上陸を行ひ第九戦區の腹とも稱すべき洞庭湖の各要衝を風潰しに占領、背後より蔣軍を奇襲し湘江水路入口の磊石山及び鹿角・九馬嘴を占領した。

陸戦隊毛利部隊は二十一日、湘漂水路啓開の艦艇及陸軍と協力、南方に敗走する敵主力を追撃して蘆林漂を占領したが、清水・久保兩部隊は二十四日日魚機及び營田（岳陽南方七十軒）を占領した。十月一日未明、敵第九十九師約三百がこの方面に強襲したが、大打撃を與へて潰走せしめた。かくして湖南作戦は順調裡に進捗、陸軍は敵の本據長沙に進攻した。敵の損害二十萬に及ぶ大戦果を擧げ、第九戦區は全く潰滅し去つた。

〔註〕 昭和十四年十二月廿八日、佛印國境附近に新作戦を展開、龍州・鎮南關を占領、昭和十五年三月十二日汪精衛新中央政府樹立を宣言、卅日國民政府南京還都を宣言し新政府が成立した。六月十七日九月廿三日皇軍は佛印に進駐した。十一月三十日、日華基本條約を締結。十二月廿三日支那方面艦隊司令長官は中南支沿岸の封鎖強化を宣言した。昭和十六年一月、海軍機は效果新橋を爆碎しビルマ・ルートを遮断す。

大東亞戰爭(一)

支那事變の擴大深刻化による日本の消耗と後退を希念する米・英・ソ、わけても米・英は極力蔣介石を支援すると共に、或は武力威嚇により、或は經濟的手段に訴へて事毎に對日干渉を試み來つたが、昭和十五年九月二十七日、世界新秩序を目ざす日獨伊三國同盟締結せられるや、東西にその舊秩序維持のため狂奔しつゝあつた米・英は、更に重大脅威を受けることとなつた。かくして米・英は日獨伊孤立化による各個擊破を企て、その主力を日本に傾注するに至つた。即ち支那事變五ヶ年の消耗によつて日本疲弊せりと誤認せる彼等は、經濟斷交を以て脅迫し、或は蘭印・濠洲・蔣政權と語らひ、所謂ABC D對日包圍陣を結成して軍事的・政治的・經濟的壓迫手段を以て、皇國に敵對するに至つたのである。政府は昭和十六年四月以來、この不當なる壓迫に對し、先づアメリカと外交交渉を開始したが、日本の眞意を曲解せるルーズヴェルト政權は、英國と結び九國條約を楯に、日本に對し、支那・佛印からの無條件完全撤兵、南京

政府の否認、日獨伊同盟の廢棄を強要し、あまつさへ既成事實たる滿洲さへ、滿洲を事變以前に戻すべしといふ言語道斷なる主張を繰り返へし、益々對日戰備を強化した。かくして滿洲事變以來、日本に敵對せる背後勢力は公然その姿を現し、日本の面前に立ち塞がつたのである。十一月十七日以來前後八回、我が誠意を以てせる日米會談は十二月五日殆ど決裂状態となり、同八日、畏くも米英兩國に對する宣戰の大詔が渙發せられたのである。大詔一度び降るや、皇國民の米英に對する恨みは一時に爆發、打倒米・英に火の如く燃え上り、我が陸海の將兵は曉闇を衝いて、大東亞周邊に擴がるABC D對日包圍陣に必殺の奇襲を敢行した。海軍部隊は海洋遙か暴風雨を冒し、ハワイの米太平洋艦隊並に航空兵力に對する大攻撃を決行し、その殆どを覆滅し去つたのを始め、ミッドウエー・香港・ウエーキ・比島・グアム島・シンガポール軍港を空襲、海陸軍協力の下にマレー半島に上陸、また開戦三日目に英東洋艦隊の主力を擊滅、更に比島・グアム・ボルネオに上陸し、半歳を出でず、ウエーキ・比島・グアム島・マレー・ビルマ・ジャバ・ニューギニヤの裁定を終へ、更に大東亞海・印度洋・北はアリューシャン列島に及ぶ東太平洋の主要敵據點を悉く制壓したのである。

この大東亞戰に於ける海軍陸戦隊の活躍は特に目ざましいものがあり、上海事變・支那事變

の實戰の經驗を生かし、各地に於てその猛威力を遺憾なく發揮した。

〔註〕 十二月八日ハワイ急襲によつて米戦艦五、甲巡・乙巡二、給油船一を撃沈、戦艦三と輕巡三、驅逐艦二隻を大破、戦艦一・乙巡四を中破、敵の空軍を潰滅せしめた。同月泰國に友好的に進駐、日佛印軍事協定成立す。十日のマレー沖海戦で英旗艦・戦艦・驅逐艦三隻撃沈、十一日、日獨伊三國同盟強化の新協定成立、獨伊對米宣戰す。

一、グアム島攻略

對米英宣戰の大詔降るや、海軍部隊は、先づ空軍を以て敵基地の猛爆撃を行ふと共に、十二月八日未明、海陸軍緊密協力の下にマレー半島・シゴラ・パタニー・コタバルに奇襲上陸を敢行し、支那方面の海軍陸戦隊は、陸軍と協力して北京・天津・秦皇島・上海・沙面の各租界に進駐、敵國駐屯兵の武装解除を行ふと共に、その權益を接收した。

更に十日未明、海陸軍協同して、グアム島に敵前上陸を敢行したのであつた。海軍陸戦隊は突如グアム島西海岸の要地アブラ港に果敢な上陸を行ひ、直ちに四圍の要衝に進撃して、米海

兵少佐以下三十名を捕虜とした他、三千噸級の油槽船一隻を拿捕、翌十一日陸軍部隊主力は首都アガニアを占領し、マクミラン總督兼要港部司令官・ザイルス副總督以下將校多數を含む捕虜三百五十名を得、以來空陸より猛襲を續行して十二日、全島を占領した。なほ米軍は、國際法で使用を禁止した毒ガス兵器多數を準備してゐたが、我が神速なる作戰によつて全部押収したのであつた。

二、比島戡定作戰

十二月十日未明を期し、海陸軍協同の下にルソン島北岸アバリ・西岸ヴィガンに上陸作戰を行ひ、米比軍撃滅の火蓋を切つた。敵は我船團近づくとも見るや、猛烈な砲火と共に執拗な爆撃を開始したが、敵彈雨飛の中を敢然上陸、十二日未明、他の海陸軍部隊はルソン島南部レガスピに上陸、南北挾撃態勢を完了した。二十日未明にはミンダオ島に上陸し、海陸軍協同して強靱な敵の抵抗を排除し、午後五時、首邑ダバオを占領した。二十二日未明、陸軍大部隊は海軍協力の下にルソン島西部リンガエン灣沿岸に上陸、更に二十四日拂曉、陸軍部隊はルソン島

東部海岸に上陸し、敵の本據マニラを五方面より包圍し、一月二日これを占領して第一期戦を完了、引續き敗殘兵の據るバタアン半島及びコレヒドール要塞攻略戦を展開した。この作戦に呼應して、海軍陸戦隊は、一月九日ルソン島南部のマスバテ島に上陸し、潜伏中の米軍重爆撃機射手を捕虜とすると共に、比軍のため拘禁されてゐた邦人約十五名を救出した。更に三月二日午前四時ミンダナオ島西端の要衝ザンボアンガに猛烈な十字砲火を冒して敵前上陸を行ひ、なほも抵抗する敵と月明下に壯絶な白兵戦を展開、午前七時半完全に同地を占領し、軍艦旗を翻へした。他の一隊は同日午後三時アヤラ(ザンボアンガ西北方六軒)に突入、監禁中の邦人婦女子六十九名を救出、また同月十五日朝、ダバオ東南四十哩のマテに敵前上陸を行ひ、同地監禁中の邦人十九名を救出した。

四月十日未明を期し、海陸軍協力の下にルソン島とミンダナオ島の中間セブ島の攻略戦が開始されたが、海軍陸戦隊の精銳はバリリー(西海岸)・アルガオ(セブ市南方六十五軒) 上陸部隊に呼應し、午前十時セブ灣に突入、敵前上陸に成功した。敵の焦土戦術によつて灣内の船舶・重油タンクが炎上、各所に黒煙天に沖する中に壯烈な市内掃蕩戦を展開、午後四時、敵を制壓して、夕刻から十一日にかけて、諸部隊は續々入城した。セブ島を防衛してゐた敵は、僅か二十

名の米人將校に指揮された、約五千の比島兵で、敗殘兵は山嶽地帯に遁入し、急拵への要塞に據つて抵抗を續けんとしたが、我が急追によつて支離滅裂となつた。

〔註〕 十一日ルソン島バタアン半島は完全に占領された。セブ島攻略戦と呼應して、四月十六日陸軍部隊は海軍の協力下にバナイ島に上陸、同島の戡定を行つたが、十八日午前九時、海軍陸戦隊はバナイ島の南部約一軒のイロイロ水道を隔て、接してゐるギマラス島のサンタロザリナ港に上陸、何等の抵抗も受けず、埠頭施設・重油タンクなどを完全に占領して軍艦旗を翻へした。五月五日、海陸協同の下に米比軍主力最後の據點コレヒドール島に敵前上陸を強行、七日午前八時完全にこれを占領した。

海軍陸戦隊は五月十七日より比島パラワン群島の戡定作戦を開始した。同日未明パラワンの門戸に當るカラミアン群島ブサンガ島沖に雄姿を現した〇隻の艦艇は、同島コロン棧橋に入り陸戦隊は直ちに上陸、前日の我海軍機の降伏勸告ビラに應じて棧橋に集つた住民の武装解除を行ひ、コロンの敵を掃蕩、十二月十日以來監禁されてゐた邦人百二名を救出した。續いてパラワン群島に進み、陸戦隊は首都プエルトリプリンセサ背後の椰子の木密林地帯に敵前上陸を行ひ、三方から首都に突入して、五十軒離れたところにある無電局の諸施設を占領した。この

無電臺はマレー・ボルネオ・セレベスなどの連絡基地をなしてゐた。

陸戦隊は引続き残敵掃蕩に移り、二十五軒奥地のイワヒヒに進出した。これを平和裡に接收するとともに、バラワン唯一の飛行場を占領した。一方本隊を離れてバラワン北東のクヨ諸島に向つた陸戦隊は、上陸後直ちに小學校長宅に隠れてゐたミンドロ島逃亡の米兵を捕虜とし、住民への悪宣傳の痛を免除し、再びコロン港に寄港、さきに救出した邦人のうち歸還希望の者七十名を收容した。この間わづかに四日、バラワン群島の各要衝は全く日章旗の威風に靡くに至つたのである。

その後陸戦隊は十月下旬までの間にクヨ群島・ビサヤ諸島の掃蕩戦を展開した。クヨ群島は殆ど無血裡に占領したが、パトンガ島には敗残兵や不逞の島民が椰子林や灌木の間から頑強に抵抗したので、陸戦隊は一味十九名を殲滅して平定した。

ビサヤ諸島（バナイ・セブ・レーテ・ネグロス）には敗残米比軍が「十一月十五日には米軍が上陸する」などと云ふデマを飛ばして治安を攪亂、剩へ皇軍に抵抗せんとしつゝあつたので、海軍陸戦隊は十月二十四日から陸軍部隊と協力して、比島最後の残敵掃蕩戦を展開した。開戦當時ビサヤ地方には約〇千の敵軍がゐたが、そのうち〇千は無條件降伏し、残る〇千は山間密林中

に逃亡し、住民を使喚し強制募集を行ひ、約半数は重軽機・自働小銃・小銃・疊刀等で完全に武装、海上の要所々々に帆船やパンカ（獨木舟）を見張に出し、日本軍が出撃すると見るや、すばやく島影に隠れてしまふと云ふ状態であつたが、海軍陸戦隊は、十月二十四日作戦開始と共に、敵の策動基地を虱つぶしに討伐した。幾十回と繰り返された陸戦隊の敵前上陸に對し、最も頑強に抵抗したのは、シキホール島南岸のラヂ部落で、敵は棧橋一帯に三重の鐵條網を張りめぐらし、我が上陸を阻止し、濱邊に土囊陣地を構築して銃彈を浴せかけたが、わが艦砲が總射撃を行つて、これを撃破した。海陸の猛攻によつて交通連絡を断たれた敵は次第に行動の自由を失ひ、間もなく自滅四散してしまつた。討伐戦開始以來、陸戦隊は、敵の無線電信所五ヶ所を破壊したほか、焼却した舟艇は約六十隻に及んだ。かくして全比島は全く戡定を見たわけであるが、海軍陸戦隊は、或は陸軍部隊の主作戦に協力し、或は單獨にて大小の群島を攻略して、華々しい活躍を行ひ、全島平定の上に重要な役割を果たした。

三、英領ボルネオ攻略

十六年十二月十六日未明、海陸協同の下に英領ボルネオ上陸作戦が行はれた。敵兵なき敵前上陸ながら、自然の猛威を敵とした壯烈極まるものであつた。上陸地、沖合に到着して、上陸準備を始める頃から、海は次第に荒れ、南の海上に二十米の突風が咆哮し、二米の激浪が立騒ぎ海面に降された小艇は木の葉のやうに翻弄されたが、この困難な条件の下に海陸上陸部隊は命令一下突進、セリアールトンへ上陸した。かくしてこの地一帯には日章旗が高々と翻へつた。次いで二十四日拂曉を期して海陸軍の新鋭部隊はボルネオ西南地方に上陸、敵の抵抗を排除し、同日午後サラワク王国の首都クチン市街に突入して忽ちこれを占領、英兵〇〇名を捕虜とし、大砲二門・自動車・彈藥多數を鹵獲し、全ボルネオ制壓態勢を完了した。爾來同島は陸軍部隊によつて裁定されたのであつた。

四、ウエーキ島の激戦

十六年十二月二十二日『太平洋の天目山』ともいふべき米海軍の東亞進攻基地たるウエーキ島（我が占領後大島島と改稱）攻略戦が展開されたが、この作戦は海軍陸戦隊の純然たる單獨作

戦であり、しかも大東亞戦緒戦段階に於て、陸戦隊が當面した最も激烈なもので、その眞面目を發揮した本格的戦闘であつた。

二十二日夜〇〇基地を發した陸戦隊の精銳は、〇〇艇に分乗して、目ざすウエーキ島に近づいた。

折柄海上は大時化で、風速十三米の烈風は檣頭に唸り、怒濤は逆巻いて艦艇を奔弄した。上陸用舟艇の下降などは思ひも寄らぬ状況であつた。そこで指揮官は艇諸共敵地に突入して上陸地點を確保するといふ最後手段を採つた。

命令一下、艇は一齊にリーフを乗り越え敵南岸目がけて突進した。珊瑚礁に挑む決死の艇は『グツツীগツツীগツツ』と無氣味な大音響を轟かせながら、まつしぐらに突入した。時に二十三日午前零時五十八分。

この時、敵は既にこの方面一帯を防禦の主陣地とし、極度に機械力を利用して、トーチカ・塹壕・防空壕等の近代的防備施設をなし、これに五吋平射、二十ミリ、七・七ミリ等の各種機銃、三吋高角砲・探照燈を多數配置し、全兵力を集中してこの陣地に據り、敵海兵隊は各個にベルグマン銃・自動小銃等をもつてその難攻不落を誇つてゐたのである。

我が艇○隻は、果然敵の百十吋探照燈の照射を受けるや、猛烈なる十字砲火に曝された。敵弾は艇の艦橋に命中して森艇長・○○航海長は頭部に重機銃弾を受けて負傷し、稻垣一等水兵と神竹二等水兵は戦死を遂げ、他の五名が負傷した。この間陸戦隊の精銳は内田・板谷の二部隊を先頭として舷側に吊した幾十條のロープを傳つて海中に躍り込み、全身ずぶ濡れとなつて、波を蹴つてウエーキ島の南岸に殺到し、敵の猛射をもともせず、早くも上陸地點を確保した。この時、

「われら敵前上陸に成功せり」

と海上の艦艇に報ずる火箭が、暗夜烈風の空高く揚つて赤く光つた。ウエーキ島と水路五十米を離れた兩隣りのウイルクス島にも、我が精銳陸戦隊高野部隊が奇襲上陸を敢行、ここにも成功の火箭が揚つた。

かくして攻略部隊は一齊に敵前上陸に成功したのであつた。敵の集中銃砲からは、凄じい火網をつくつて我が方に集注する。五吋平射砲は頭上に炸裂し、高角砲の水平射撃は間斷なく續いた。我が陸戦隊の勇士は、「敵の機械とわが肉弾と何れが勝つか。ただわれらには一死大君に報ずる熾烈なる精神力と逞しい肉弾があるのだ」と鐵兜の底が砂にめり込むほど低くうつ伏し

て、突撃の機を窺つた。敵の曳光弾は青く、赤く、闇を縫つて飛んだ。内田部隊は敵の最重要陣地たる高角砲臺目ざして、一寸刻み、五分刻み、じり／＼と匍匐東進し、同砲臺を包圍して敵前五十米に近づいた。敵の集注砲火はいよ／＼熾烈の度を加へた。

午前三時半頃、夜はほの／＼と明け初めて敵砲臺が前方に大きく浮び上つた。もうあと二十米といふ時、一弾は内田部隊長の眉間を貫き、他の一弾は終始部隊長に寄り添つた○○副官の鐵兜を衝撃した。副官が駆け寄つた時は、既に内田部隊長は事切れてゐた。副官は一水兵をして部隊長を背負はせて、代つて指揮をとり、同砲臺裏側に迂廻して肉弾突入を敢行、死守してゐた敵は、我が肉弾の威力の前に敗走、同砲臺は遂に我が手中に歸した。激戦實に六時間餘であつた。艇長は負傷者を残す全員を上陸地點に送り、自らは「艇と運命を共に」すべく、紅蓮の焰に映える艦橋上に負傷の身を起して大きく手を振つてゐた。部隊は敗敵を追つて更に敵飛行場に向つて東進した。ウエーキ島の東南端ピーコック砲臺の敵は頑強に抵抗した。陸戦隊勇士は战友の屍を越えて進んだ。この時海鷲が島の上空に殺到して、重要軍事施設を爆砕し、全島の敵を地上すれ／＼に銃爆撃した。海上の艦艇は同島の四周を取り巻いて寸毫の油斷もなかつた。地上・空中・海上よりする三方攻撃は、全島機械化された不落の要塞を完全に制壓した。

夜は全く明け放れ、南國の陽が燦々と輝き始めた。二部隊はウエーキ島で、他の一部隊はウイルクス島で、頑敵の反撃に對して果敢な死闘を続け、手榴弾戦に次ぐ白兵戦を展開した。〇〇部隊長は敵弾に胸板を貫かれて重傷を負ふ。米マリンと刺し違へて戦死した戦友の屍を横にして、朱に染つた我が水兵が必死に戦つてゐた。

これより先き、同島東南端近く、舟艇によつて上陸北進した部隊の一隊は、同日午前六時二十分、前方道路上を疾驅して來る一臺の小型乗用車を認め、灌木の繁みから飛び出し、その前方に立塞がり、矢庭に銃剣を擬して『停止』を命じ、車内の二高級敵士官を捕虜とした。この二士官は、敵ウエーキ島總司令カニンガム中佐とその幕僚であつた。敵の白旗は捕虜となつたカニンガム總司令部から揚つた。しかし前線ではなほ激戦を續けてゐたので、我部隊長は自ら白旗を掲げた敵總司令を伴つて、ウエーキ島東南部とピール島の敵軍前線に進め、停戦降伏を下命せしめ、一方敵幕僚をして同じく白旗を立てしめて、ウエーキ島南部の海軍に『停戦』せしめ、こゝにウエーキ・ピール兩島はまづ降伏した。

この時なほウイルクス島は、激闘死闘の最中で、〇〇部隊は少數の兵力を以つて奇襲克く敵の中心陣地を占領して、こゝを死守し、優勢なる敵の反撃に抗して文字通り、屍山血河であ

つた。足部に敵弾を受けた部隊長は、

『全員仕るるとも、この陣地を死守せよ』

と勇戦激闘した。敵の白旗はウエーキ島からウイルクスにやつて來て、銃砲聲が止んだ。かくしてウエーキ三島の敵全軍は全く降伏し、直ちに武装解除され、完全占領が成つた。時に午後零時三十分。我軍は、敵總司令官以下兵五百・その他一千百名を捕虜とし、武器・彈藥多數を鹵獲したのであつた。嶋田海相は議會に於ける戦況報告演説の中でこの攻略戦を、『壯烈鬼神も哭く』と形容したほどで、この戦ひこそは、正に大東亞戦争の最も代表的な陸戦隊戦闘の一つであつた。十二月二十三日大日本軍司令部の名に於て、『ウエーキ島は全部大日本帝國の國有たる事』を宣言、やがてウエーキ島は『大鳥島』、ピール島は『羽島』、ウイルクス島は『足島』と日本名に改稱された。

〔註〕 十二月廿一日日泰同盟條約締結、一月二日マニラ陥落、廿七日マレーのエンダウ沖で我が驅逐艦二隻、英驅逐艦二隻と交戦、敵の一隻を撃沈す。

大東亞戦争(二)

一、蘭印諸島戡定戦

大東亞戦の海軍陸戦隊の活躍は、特に蘭領東印度諸島の戡定戦に於て華々しく、特に本作戦には海軍特別陸戦隊の落下傘部隊が初出動したのであつた。蘭印諸島に對しては、大東亞戦争開始以來靜視してゐたが、漸次米・英・蘭の對日抗戰基地化するに至つたので、昭和十七年一月十一日、斷乎これを攻略することに決し、海陸軍の精銳部隊は同日未明、蘭領ボルネオの咽喉タラカン島に敵前上陸を敢行した。

我が奇襲に驚いた蘭印軍の一部は、小船によつてボルネオ本島に逃れたが、他の大部分の敵は全部降伏し、翌十二日海軍特別陸戦隊はタラカン飛行場を占領した。

更に海陸軍部隊は、一月二十四日未明を期して蘭領ボルネオ本島の要衝バリツクパバンに敵

前上陸を行ひ、敵の抵抗を排し二十五日午前一時、これを完全に占領した。陸軍部隊は引續き二十七日、ボルネオ西部パマンガに敵前上陸し、二十九日ボンチアナを占領、引續き島内の掃蕩を行ひ三月下旬同島の戡定作戦は略々完了したが、海軍特別陸戦隊は三月九日サマリダを中心にして敵を急追、十日マメタルハム河上流にその大部隊を捕捉降伏せしめ、更に二十日にはサマリダ一帯の敗殘敵兵團が我が猛攻に耐へ切れず白旗を掲げて無條件降伏を申入れて來た。直ちに敵將校二百七十五名・同下士官兵千四十九名の武装解除を行つた。

越えて六月二十一・二十二の兩日に亘つて、陸戦隊はボルネオ方面・ナツナ群島の戡定作戦を敢行した。ナツナ群島はアンバス諸島とを結んで、敵側がシンガポール・蘭印の最後の防衛線とし、また所謂ABC D對日包圍前進基地とも恃んでゐただけに、防備嚴重を極めたが、陸戦隊は上陸後忽ち殘存する敵を完全に撃破し、敵が戦前より潜水艦との連絡に利用しつゝあつた無線電信所及び軍事施設を手中に收め、ナツナ並びに南ナツナ群島に軍艦旗を翻へした。陸戦隊は直ちに治安確保の隣保班の組織を命ずると共に、村長・區長を任命、住民達に大東亞戦争の赫々たる皇軍の戦果を知らしめ、更に聖戰の意義を説くなど、宣撫に努めた。

またバリツクパバンにあつて、ボルネオ本島の警備に努めつゝあつた海軍陸戦隊の警備隊

は、その後バリツクパパン北方六百五十軒のボルネオ最奥地ロナワン高原に蟠踞する蘭・米・英混成敗殘部隊殲滅戦を開始、少數の挺身隊を組織して基地サマリングダを出發、嶮山を攀ぢ、密林を這ひ、大自然の猛威と闘ふこと實に四週間、「健兵日本」の眞價を遺憾なく發揮してウマボンボに進撃、敵地ロナワン間五十軒の嶮路を二日間で突破、拂曉を期して天然の要害に圍まれたロナワンに立籠る敵混成部隊に對し、一齊總攻撃を開始した。

頑強に抵抗する敵を、僅か三十分で沈黙せしめ、更に遁走する敵を一兵も殘さじと、密林地帯に壯絶な捕捉殲滅戦を展開してこれを完全に潰滅、蘭將校以下六十六名を俘虜とし、武器・彈藥多數を押収した。これによつて舊蘭領ボルネオに於ける敵兵は一兵だに殘さず殲滅され、五十四萬平方軒に及ぶ蘭印最大のボルネオ島戡定はこゝに全く完了するに至つた。

二、セレベス島攻略と落下傘部隊

昭和十七年一月十一日の蘭領ボルネオ、タラカン島上陸に呼應して、海軍特別陸戦隊はセレベス島攻略戦の火蓋を切り、陸戦隊の精銳は、セレベス島北岸の要衝、メナド及びケマに敵前上

陸を敢行したが、この作戦には海軍特別陸戦隊の落下傘部隊が初出動して、敵をアツと驚愕せしめた。即ち落下傘部隊は十一日上陸部隊と呼應し、海岸線を距たること數十軒、敵の眞直中にある敵據點カカス飛行場に降下し、上陸部隊との連絡を完成して、十四日までミナハサ州一帯の敵要地を一舉に攻略した。

この落下傘作戦は、單身敵地に投ずる最も大膽な最も危険なものであつた。特にメナド方面の防衛に當つてゐたのは、射撃の上手なオランダ兵であり、落下傘で降下中は固より、着陸した後も、敵の射撃は止まず、落下傘部隊の或る勇士の如きは、鐵兜の縁で大地に穴を掘り、敵の猛射を防いだものさへあつた。しかるに我方の犠牲は極めて僅少で、飛行機から降下の途中には一人の戦死者もなかつた。

敵は十分に我が落下傘部隊に備へてゐたらしく、幅一米半から五米の拒馬が約三百、さらに多數の竹槍が打ち込んであつた。それに二臺の戦車と八個のトーチカは、狭い着陸地域のぐるりをづらりと取巻いて銃口を何れも内側に向けてゐた。勇士達は落下し乍ら、バリケードとバリケードとの間に着陸するに苦心した。着陸するや、二十米の距離にあるトーチカ陣地が十字砲火を噴いてゐた。勇士達は匍匐して、落下した武器梱包に辿りつき、これを身につけて、直ち

に應戦した。我が擲弾筒の彈丸がトーチカ附近で炸裂するや、これに呼應して突撃が敢行され、かくて敵の防禦陣地を瞬く間に奪取した。

この時、カカスの街から一臺の装甲自動車が見れ、猛烈な掃射を我に浴びせて逸走した。我が部隊が前進に移るや、途中の牧場の真ん中でこの装甲自動車を發見した。二名の勇士は忽ち道路の横に輕機關銃を据ゑて装甲自動車に挑戦した。装甲車も猛射を開始し、二人の姿は敵彈の砂煙で見えなくなつた。だが二勇士は一步も退かず堂々と抵抗した。やがて敵がひるんで徐に後退するとみるや、二人はガバと跳ね起き、逃げんとする装甲車に飛びついて、素早く携行してゐた軍艦旗をその上に懸した。

見渡す限りの緑の牧草の上に軍艦旗が高く懸つて、落下傘部隊員の勇氣を百倍せしめ、カカスの街も忽ち我が占領するところとなつた。翌十二日には新銳落下傘部隊も來援し、メナドに敵前上陸した特別陸戦隊との握手も成り、我が國最初の落下傘作戦は劃期的な成功を収めたのであつた。

我國に落下傘が紹介されたのは大正九年で、陸軍が英・佛兩國から氣球を購入した時、これに附隨して落下傘が齎され、爾來研究が續けられた。海軍落下傘部隊は〇年〇月、特別陸戦隊

員の精銳をすくつて編制された。落下傘部隊は、陸戦隊の別働隊なのである。落下傘部隊の編制以來連日連夜の猛烈な訓練が續けられた。まづ體を柔かくするための運動、柔道の受身に似た前轉び・横轉び・後轉びの訓練、飛行機や跳躍臺からの飛出し訓練、ブランコから飛降りる着地訓練などが續けられ、それから傘の折疊み訓練が行はれ、その訓練の傍ら陸戦訓練が行はれる。

初代訓練隊長に任ぜられた某部隊長は、「朝起きるとまづ海軍體操、それから朝食、食後三十分休憩するだけで、晝食まで訓練。晝食後また三十分休みがあつて、夕食まで訓練、夕食後もまた就寢まで訓練といふ風に、自分の自由な時間もなければ、疲れた身體を休める時間さへない文字通り血のじむ猛訓練であつた」と述懐してゐるのにも見ても、如何に猛烈な訓練であるかが判る。かくの如き血のじみ出るやうな猛訓練によつて、短時日の間に落下傘部隊は誕生を見たわけである。海軍落下傘部隊は、世界に於て帝國海軍のみであり、大いなる誇りの一つである。

空からと海からの陸戦隊の挾撃によつて、ミナハサ地方一帯を攻略した我が特別陸戦隊は、一月二十四日更にセレベス東岸のケンダリーに敵前上陸を行ひ、折柄の猛雨を衝いて市街の掃

蕩戦を展開した。蘭印軍は、堅固な防禦陣地に據つて抵抗せんと試みたが、『日軍來る』の聲に先づインドネシヤ兵が動搖し、我が猛攻の前に忽ち潰滅し去つたのであつた。二月九日にはセレベス島南端の要衝マカツサルを占領、引續き奥地掃蕩戦を行ひ、二十三日マリノシンジャイ・ベンゴ等の殘敵を撃破、二十四日はシンカン・ワタンボウス附近の敵を掃蕩、二十八日早朝には同地の敵陣地に肉薄して激戦の後これを奪取、次いで三月一日早朝マロス東方三十軒の敵要衝チャンバに突入してこれを占領した。引續きこの方面の敵主力と激戦を交へ、セレベス方面敵司令官フォーレン大佐以下千六百四十名（内蘭人約三百五十）を捕虜とし、武器・彈藥多數を鹵獲した。

三月十七日には、同島西南部の要衝エンレカンの殘敵が降伏を申出で、續いてボネ灣のマリ・パロブ兩地の殘存敵兵も一般蘭人と共に三月二十七日早朝無條件降伏を申出た。かくして海軍特別陸戦隊の單獨作戰によつてセレベス全島の裁定は、短時日の間に完了を見たのであつた。

三、アンボン島攻略

十七年一月三十日未明、海軍特別陸戦隊は陸軍と協同して、蘭印諸島右翼の軍事據點アンボン島に敵前上陸を敢行したが、この攻略には一城一砦を血と肉で戦ひ取る激闘を展開した。アンボン附近の上陸地點は敵の防備嚴重を極め、四邊には鐵條網を繞らし、塹壕を掘り、砲臺を築いて鐵壁の堅陣を誇つてゐた。しかもアンボン兵は蘭印兵中最も精強な兵であつた。一日未明特別陸戦隊は、この堅陣突破の上陸作戰を開始したが、海岸線を抜くと、山腹陣地には第二段のトーチカ、散兵壕、鐵條網、更に戦車、装甲車を配した鞏固な布陣が續いてゐた。

海上からは海軍艦艇が陸戦隊に協力して砲火を開いた。航空部隊もまた一つ一つ前面のトーチカを叩き潰すが、深い布陣は容易に潰滅しなかつた。艦艇は、海岸近くまで進出して敵の砲臺に有効適切な射撃を送つたが、頑敵は尙ほ抵抗を續けた。そこで陸戦隊は、夜に入つて肉弾戦を敢行して、これを奪取した。敵の最後の據點ラハ飛行場を奪取したのは二月三日未明であつて、俘虜五百、その他彈藥多數に上つたが、これはこの局地戦闘に於て肉弾戦が、如何に凄

絶を極めたかを物語つてゐる。

〔註〕 二月十五日シンガポール要塞陥落、海軍部隊は十四日拂曉英東洋艦隊の根據地たるセレター軍港に進入、陸戦隊を以て殘敵を掃蕩し同日正午英海軍鎮守府を占領した。十八日第一次戦捷祝賀を行ふ。

四、バリ島及びチモール島占領

十七年二月十九日、海陸軍協同して、ジャバ本島に近いバリ島に上陸し、同島の首都で第一の都會デンパサルを占領して忽ち全島を攻略してしまつた。

また他の陸海軍部隊、二月二十日未明、蘭葡兩領たるチモール島クーパーン及びデリー方面に上陸し敵の掃蕩を開始したが、この作戦には再び海軍落下傘部隊が出動して、陸上の特別陸戦隊に協力した。

クーパーンに降下した海軍落下傘部隊の任務も、セレベス島攻略の際と同様に、二月二十日クーパーンに敵前上陸した部隊と呼應し、一舉に敵中に突入、クーパーン飛行場を占據するにあつた。

落下傘部隊は、二月二十日午前十時四十五分、同飛行場の東北十八軒の牧場に降下を開始した。敵の抵抗なく、幸先よしとばかり、降下後直ちに隊伍を整へて、西方約四軒のババウの部落指して突進した。午後一時同部落の東端で、初めて敵と遭遇した。敵はトーチカに據り、戦車と装甲車を前面に押立てて頑強に抵抗したが、決死の隊員は、忽ち戦車一臺・装甲車一臺を分捕つた。

午後五時頃に至るや、敵戦車の大部隊が落下傘部隊の正面に現れた。これは、その朝クーパーン南方マリ岬に奇襲上陸した我が陸軍部隊に叩かれて退却して來たものである。

かくて戦車群との間に白兵戦が展開され、戦車・装甲車十三臺を分捕つた。しかしこゝで敵と對峙してゐては肝腎の飛行場占領の任務が遅れることとなるので、部隊長は二十一日未明、敵の側面を迂回してジャングル地帯を突破し、飛行場の方向に一氣に突入する戦法を採つた。部隊は磁石を頼りに進み、同日夕刻、漸く飛行場南方四軒の地點に達した。二十二日未明を期し、最後の肉弾突撃敢行を企圖したが、その前夜、タンク倉庫に火を放ち、飛行場を爆破して退却してしまつた。かくて我が方は難なく飛行場を確保すると共に、進撃の手を緩めず敵主力の追撃戦に移つた。この頃、一日遅れて降下した追及部隊も合流し、また奇襲上陸の陸戦隊及

び陸軍部隊との連繫も成り、所期の任務を果した。各部隊は引續き殘敵掃蕩戦を展開、三月十日テリー西方のアイペロリキリー、及びアイレウの敵を撃滅したのを最後として、全島の戡定を完了した。

五、ジャバ攻略と陸戦隊

十七年三月一日未明を期し、ジャバ（新名ジャワ）島攻略戦の火蓋を切つた。陸軍の大部隊は、海軍部隊護衛の下に空・陸・海よりする敵の猛反撃を冒しつゝジャバ島東部・中部・西部の三方面に強行上陸に成功、直ちに破竹の猛進撃を續け、蘭印軍は九日全面的に降伏するに至つた。本作戦は陸軍部隊によつて行はれたが、スラバヤ港邊に待機中の海軍陸戦隊は、蘭印軍の降伏と同時に歩武堂々進駐を開始、直ちに同港海軍關係施設を接收した。

〔註〕 三月一日ジャバ沖海戦で米・英甲巡二、漆・蘭乙巡四、潛艦七、驅逐艦八、砲艦一、掃海艇一を撃沈、米英蘭濠聯合艦隊を潰滅。八日、ビルマのラングーン占領。十二日第二次戦捷祝賀を行ふ。四月十八日、米機が我本土を初空襲。

六、小スタン列島戡定

五月初旬、海陸軍共同して蘭印最後の據點小スタン列島戡定作戦を展開、先きに攻略したバリ島・チモール島を除くロンボック・スンバワ・フロレス・スンバ等を、僅か十日間で悉く占領し、オランダ勢力を全く一掃した。この作戦に當つて海軍陸戦隊はスンバ島を單獨攻略すると共に、九日午後、ロンボック島西海岸アンペナンに上陸、十日東南海岸ラボハンハジに白晝上陸した陸軍部隊と協力、多数の武器・軍需品を鹵獲して同島を完全に占領し、更に十日午前スンバワ島に上陸、十一日午前上陸した陸軍部隊と協力、十六日までの間に全島を制壓した。フロレス島最大の要衝エンデに上陸し西進した陸戦隊は、十六日陸軍部隊と握手、四日間で全島を占領、我軍は一兵も損せずして小スタン列島の戡定を終へ、東印度作戦に有終の美を収めたのであつた。

七、ビスマルク群島戡定

十七年一月二十三日、わが海陸の精銳は濠洲の前哨基地ニユーブリテン島（ニユーギニヤ島東方）の首都ラバウル附近に上陸したが、同島守備の濠洲軍は逸早くドツク、その他軍事施設を破壊して退却したので難なく掃蕩を終へた。この作戦に呼應して海軍特別陸戦隊は、同日未明ニユーアイランド島のカビエングに敵前上陸したが、同方面の敵も『皇軍来る』の報に驚いて税關・棧橋に放火、飛行場を爆破して逃走。我が陸戦隊が上陸した時には既に敵影なく、無血裡に軍艦旗を翻へしたのであつた。ラバウル・カビエング攻略の海陸軍部隊は、その後隨所隨所にビスマルク群島の攻略戦を展開したが、特別陸戦隊は二月九日ニユーブリテン島南部のガスマタを完全に占領した。

また四月八日午後四時三十分、特別陸戦隊はアドミラリテイ諸島マヌス島の要衝ロレンガウに無血上陸、軍艦旗を翻へした。アドミラリテイ諸島はニユーギニヤ北東に位し、ビスマルク群島のニユーブリテン、及びニユーアイランドに飛石傳ひに連なる一群の島嶼であつて、マ

ヌス島の要地ロレンガウは濠洲軍の水上基地に使用され、一月のラバウル占領前までは、専ら西南太平洋の飛行艇中繼基地の役割を演じてゐたが、その後我が海鷲の猛爆によつて、その役割を喪失した。我が特別陸戦隊が上陸するや、敗敵並びに敵性國人は逸早く逃亡し、また我が海鷲の猛爆によつて、發信所・兵舎・彈藥・燃料・糧食等の各倉庫を始め、軍事施設は悉く灰燼に歸してゐた。同島に在住してゐた若干の日本人は開戦と同時に悉く拉致された。このアドミラリテイの攻略を最後に、東西五百哩・南北三百六十哩に亘るビスマルク群島の戡定は全く完了した。

八、ニユーギニヤ攻略

十七年三月八日未明、海陸軍協同の下に、ニユーギニヤ島東岸の要衝サラモア並びに新首都ラエに敵前上陸を敢行した。上陸軍はマーカム盆地に沿つて西方に進軍、ウオーク溪谷に沿ふジヤングルを分けて島内深く進撃したが、同月三十一日海軍部隊はモルツカ群島及び西部ニユーギニヤ北半の大規模な攻略戦を開始した。

まづ陸戦隊は、西部ニューギニアの西端の要衝フワクフワクを先づ掌中に收め、次いで、石油の豊庫バホを占領、同地北部のマクノワリ・モミの兩要衝を始め、ナビレ・サルミなどを次々と攻略、更にニューギニアの東部・西部の中央に當るホランジャに進出、無血占領して同島の生命を扼した。

他の陸戦隊はニューギニア攻略部隊に呼應し、周邊に散在するモルツカ群島に果敢な敵前上陸を敢行して、壯烈な戦闘を繰返へしつゝ、航空基地ブラを占領、矛を轉じてソロン島を攻略、同島の龐大な飛行基地を接收し、更にジロ島の西端テルナテ・セルイ全島を截定、四月十九日までの二十日間に全作戦を終へ、捕虜〇〇名・武器・彈藥多數を鹵獲し赫々たる戦果を收めた。

九、ソロモン群島奇襲

ニューギニアのサラモア・ラエ攻略に次いで、三月十日早朝、海軍部隊はソロモン群島の最北端ブカ島のクエーンIIカララ灣に進入、陸戦隊は果敢な敵前上陸を敢行して、全島一帯に亘

つて掃蕩戦を開始、午前十時半ソロモン群島に最初の軍艦旗を翻へした。同灣は低い山に圍まれ、水深五十呎、天然の要害をなし、我が本土目指して北進を企圖せる敵米濠艦隊の泊地として利用されてゐた。

五月に入つて海軍特別陸戦隊は、更にソロモン群島のツラギ・ガブツ兩島攻略戦を展開した。ツラギ島攻略を決行した一隊は、〇日午前一時十分上陸に成功、直ちに島内の掃蕩を行つたが、敵は我が軍の上陸を豫知し、既に遁走し去つた後で、住民の姿さへ見られず、全くの無人島と化してゐた。一方ガブツ島攻略の一隊は午前零時十五分無血上陸に成功、島内の掃蕩に移つたが、同島の敵も我が軍の上陸を怖れ、ガソリタンクに火を放つて逃走し、また彈藥庫・兵舎はダイナマイト爆破の装置を施し、導火線に點火して逃走したのであつたが、逸早く發見した陸戦隊勇士の果敢なる處置によつて爆破寸前消止められ、彈藥庫内の機銃彈〇萬發等、總べて我が海軍特別陸戦隊の鹵獲するところとなつた。敵は兩島の喪失に絶大な致命傷を蒙ることとなつたので、同島の奪還を期し、機動部隊は數次に亘つて反撃し來つたが、我が陸戦隊警備兵は熾烈なる防空砲火を以てこれを悉く撃退した。

一〇、アラフラ海域制壓

越えて七月下旬海軍部隊は北濠への中間基地タウンズビル・ポートヘッドランドの兩要衝に長驅渡洋爆撃を敢行して、敵の心膽を寒からしめると共に、特別陸戦隊はアラフラ海の浮島、アル諸島・ケイ諸島・タニンバル諸島の各要地に上陸戦を敢行した。敵はこの諸島に據つて我が濠洲攻撃を積極的に防衛せんとし、特に七月初旬から濠洲に逃亡したオランダ敗残兵を再編制してこの地域に配置し、ゲリラ戦を企圖してゐたのであるが、我が一撃の下に潰え去つたのであつた。

即ちアンボン島〇〇基地に待機中の我が特別陸戦隊は、七月三十日未明基地を出發、一路タニンバル諸島に向つた。ヤムデナ島の主邑サムラキは、ポートダーウインの前哨基地であるばかりでなく、敵はその東西タトコール島には陸上飛行場を急造、サムラキ灣を秘密潜水艦基地・水上機基地として反撃の機を窺ひつゝあつたのである。午前四時を期し〇〇中佐の指揮する海軍陸戦隊は、ヤムデナ島・サムラキ島・ババル島・デバールフラツク島・リタベルマツクス島

に一齊に上陸した。サムラキを除いた諸島は無血上陸の上瞬く間に裁定したが、サムラキは白人軍・土民多數から成る敗残兵が頑張つて抵抗した。

サムラキ灣棧橋に着いた隊長はサツと白刃をひらめかして、眞先に陸地に跳び上り、目的の建物に向つて突込むと見る間に、隊員も我遅れじとワツと喚聲をあげて突撃した。突如敵の機銃が火を噴いた。無数の曳光弾が飛來する。「突込め！」隊長の鋭い聲に續いて、隊員は肉弾突撃を敢行した。我艦艇の砲撃と空軍の爆撃によつて、敵の軍事施設は次々と破壊され飛散した。敵は我が肉弾強襲の前に戦意を失ひ、前方の建物に一流の白旗を掲げ、戦闘僅か〇分で午前十一時無條件に降伏したのであつた。

〇〇部隊長の指揮する一隊は、同日午前五時ドボ島に向つた。山の無い同島には無電臺の鐵柱が二本聳えてゐる。我が奇襲部隊は音を忍んで市街南端の白砂にサツと上陸した。二隊に分れ、一隊は無線電信所へ、一隊は武装警官隊本部に向け、暗闇の中を霧らに突つ込んで行つた。警官隊は寢込を襲はれ大狼狽、全部我が捕虜となつた。更に息つく間もなく兵舎に向つて突撃、こゝでも戦闘もなく〇〇名を捕虜とした。續いて島内の掃蕩に移つたが、オランダ兵幹部は既に逃亡した後であつた。無線電信所占領部隊は住民の案内で密林の細路を抜けて電信

臺を襲撃、兵數名を捕虜とした。アル島はかくして完全に占領された。

ケイ諸島に向つた一隊は、三十日午前一時三十分、季節のうねりで猛烈な波を越え、ケイ諸島南端に迫つた。その時、突如揚る一點の烽火に次いで左右に烽火が揚つた。これは敵が島民に命じて揚げさせた合圖である。勇士達は固唾を呑んでじつと見つめる間に、舟は早くも幅百米ほどの狭水道へ突進した。時に午前三時、一隊はツアールの敵前上陸に成功、忽ちダーウィン方面と連絡通信に當つてゐた敵の無線電信所を占據、次いで二隊に分れて市内掃蕩を開始、午前八時四十分東南外れの敵兵舎に突撃して寝込みを蹴散らし、更に前進すると大樹の蔭に重機を据ゑてゐた敵は、盲滅法に撃ちかけ、小島裁定には稀な壯烈な戦闘となつた。しかし我が軍の正確な照準は、次々と敵陣を沈黙せしめ、逃げ惑ふ敵指揮官コントレール達を俘虜とした。狭水道から二隻のジャンクで逃げた二十名は、瞬く間に海底の藻屑となつた。ラングールに向つた一隊はツアール狭水道を距てた對岸、ヌフタウン島小部落の船附棧橋に上陸、ラングールへ約三杆進撃して四時三十分無血裡に同島を裁定した。かくして濠洲が前進據點と頼む三諸島は僅か一日にして全く我が手中に歸したのである。

一一、印度洋諸島攻略

三月二十三日未明、海陸軍は南アンダマン島ポートブレアンに奇襲上陸を敢行し、忽ち住民兵三百を捕虜とした。ポート・ブレアン上陸部隊に呼應して、他の陸戦隊は同島の玄關とも云ふべきロス島に上陸し、これを無血占領した。かくして印度洋上の要衝アンダマンは僅か一日といふ驚くべき神速さを以て完全に攻略されたのであつた。

三月三十一日、海軍陸戦隊の精銳は、更に印度洋上の英領クリスマス島（ジャワ・スマトラ間南方二百廿哩の地點にある）攻略を開始、海鷲協力の下に同日早朝敵前上陸を行つたが、敵はわが進撃を怖れ、逸早く同島を撤退してゐたので、上陸の勇士は全然敵の抵抗を受けず、午前九時五十分完全に占領した。

六月十三、十四日兩日、海軍陸戦隊はスマトラ西北端からアンダマン群島へ飛石狀に連なるベンガル灣上の要衝、英印政府に直屬するニコバル群島の奇襲占領に成功した。十三日午前九時半、小ニコバル島のミロル近くに到着した陸戦隊員は、勇躍小艇に移乗して、うねりの大き

な波浪を蹴つて砂濱に突入、氣負ひ込んで椰子林に進撃したが、敵はわが進撃を察知して早くも退散した後であつた。その日の夕刻には、更にニコバル群島の略々中央に位するナンコリー島を占領した。更に翌十四日、午前八時基地を出港したわが艦は群島最北端に位するカールニコバル島に向ひ陸戦隊が上陸したが、敵影なく海岸に軍艦旗を掲げた。かくして無血裡にニコバル島の戡定は終つた。

〔註〕十七年五月八日、海軍部隊は珊瑚海々戦に於て米空母二・米戦艦一・甲巡一・驅逐艦一を轟撃沈し、米英戦艦二・米甲巡二・大型給油船一を大中破・飛行機九十八機を撃墜して米英聯合艦隊を撃滅した。

一一一、アリユーション兩島攻略戦

十七年六月四日、海陸協同して、アリユーション列島の敵據點攻略戦を展開、ダツチハーバ1及び同列島一帯を急襲したが、海軍部隊は陸軍と協力、七日キスカ島を占領、次いで八日にはアツツ島を占領した。キスカ島上陸部隊は七日午後九時、部隊長の訓示を受けて、暗闇の中

を舟艇に分乗して進發、午前十時二十分、見事上陸に成功した。キスカ島は北方特有のツンドラに蔽はれ、枯草が膝を没するほど一面に深々と生え、敵ならぬ枯草に足を取られ、難行軍を續けて山嶽地帯に入つた。雪のある山から谷へ、谷から山へ、この夜行軍は〇〇灣まで續いた。午後十一時四十分、全員汗だくで高地に到着した。そこは一面の高山植物地帯であつた。八日午前零時四十分、斥候が捕虜二名を得た。機銃はしばしば鳴つたとみえたが、間もなく平靜にかへり、部隊は前進を續けた。午前一時半、〇〇灣を眼下に見下す高地に到着、午前四時、丘の中腹に整列して『天皇陛下萬歳』を奉唱した。我が艦隊は次いでキスカ灣に入港した。かくして北方敵の前進基地の一角に軍艦旗が初めて翻つたのであつた。

キスカ島攻略に呼應しアツツ島攻略を目ざすわが艦艇部隊も、七日朝ベリング海を突破、同夜遅くアツツ島に迫つた。午後十一時、ホルツ灣敵前上陸の陸軍部隊と相前後して、わが精銳陸戦隊はチチイヤコブ灣口目指して突き進んだ。八日午前零時半、鐵舟はチチイヤコブ灣口右側の岸壁にとりついた。部隊は眼下に數丈の雪溪がにぶく光る中を前進した。かくしてアリユーション西端のアツツ島も、我が手中に歸した。占領部隊によつてキスカは鳴神島、アツツは熱田島と假稱されることになつた。

〔註〕アリニューシヤン奇襲と同時に海軍部隊はミッドウエーを襲撃し、米空母二・甲巡一・潜艦一隻を撃沈、飛行機百五十機を撃墜、重要軍事施設を爆砕した。我方も又空母一喪失、空母一・巡艦大破、未歸還機三十五を出した。

一二、マキン島反撃の敵撃退

わが太平洋占領地の最東端、ギルバート島北端のマキン島は、對米英宣戦後、わが海軍陸戦隊が占領したものであるが、十七年八月十七日未明、二隻の潜水艦に分乗した敵米海兵隊二百名餘りが反撃し來つた。彼等は十三センチ小銃・五〇連發トムソン拳銃・ル式機銃・煙幕展開のため、の發煙器等の新式武器を持ち、ゴムボートに分乗して、わが陸戦隊守備隊本部より二キロばかり離れた地點に上陸した。午前三時四十分、島民の急報を受けた守備隊は、トラツクで現場に急行し、棧橋附近で敵と遭遇し、五十米の距離で火蓋が切られたが、敵二百名に對し、味方は僅か〇〇名の少數であつたが、本部に宛て、「最後の兵まで戦ひ死守せん」と悲痛な無電を發して敵と對峙した。

激闘のため我が部隊の彈藥は次第に盡きて來た。本部と連絡せんとして二人の連絡兵は小舟に乗つた。櫓がなく、鐵兜で漕いだが、潮流に流され、舟は沖へくと流されて行つた。指揮官はこれまでと決意し、右翼陣地に十數名を残し全員「天皇陛下萬歳」を奉唱して突撃した。この頃からわが航空部隊は續々とマキン島上空に達した。既に十七日の朝が訪れてゐたが、敵は我が守備の部隊が大半戦死した事を知らず、背後に迂廻して味方部隊と同士討ちをやり多くの犠牲者を出した。十八日我が航空部隊は再度來襲、爆撃や地上掃射で敵を悩ました。マキン島には逃げ遅れた敵兵〇〇名が残存してゐた。敵は驚いて投降書を認め、島民に託し、我が部隊に降伏を申出たが、島民が戦火に戦いて連絡しなかつた。島民が未だ連絡しないことを知らぬ米兵は、日本が降伏状を受取らぬと早合點して、十八日夜逃走した。

二十日には我増援隊が到着、翌二十一日艦船による援軍も上陸し、直ちに島内の掃蕩を開始した。一方逃げ遅れた敵兵のうち、二十日夜筏で離島しようとした四名は淺瀬に乗上げ、ジャングルに遁入したが、こゝに逃込んでゐた他の五名と共に我掃蕩隊に捕へられた。十七日未明より十八日夜半に至る約四十時間、われに十倍する敵を向うに廻し一步も譲らず、敵は兵員の半數以上を失ひ、多數の遺棄屍と九名の捕虜を残してゲリラ戦の企圖を放棄する外はなかつたの

である。大東亞戦以來、陸戦隊の活躍は前述の如く實に華々しいものがあり、攻撃に於て精強無比であることを示してゐるが、この一戦によつて同時に『守つても強い』陸戦隊であることを誇示し、支那事變劈頭、世界を驚倒せしめた鐵血陸戦隊の偉勳は、東南太平洋の孤島にも再現、永く青史を飾つてゐる。

〔註〕 八月十四日ソロモン第一次海戦に於て米英甲巡一〇・米英乙巡四・驅逐艦九・潜艦三・輸送船一〇を撃沈・甲巡一・驅逐艦三・輸送船一撃破、飛行機五十八を撃墜した。我方自爆機廿一機、巡洋艦一隻輕微の損傷を受く。廿四日發表の第二次ソロモン海戦に於て、米大型空母一撃破、米新中型空母一・米戰艦一中破、我方小型空母一大破、驅逐艦一沈没す。

第二次ソロモン海戦以後八月廿五日より十月廿五日までに、米空母一・巡艦三・驅逐艦五・潜艦六・輸送船六・掃海艇一撃沈、米戰艦・空母・巡艦・潜艦各一隻、輸送船二・掃海艇一を大破、米空母一を中破、飛行機四百三機を撃墜、撃破九十七機に達す、我方また巡艦二・驅逐艦二・潜艦一・輸送船五沈没し、驅逐艦一・輸送船三大破、巡艦一・驅逐艦二・潜水艦一・輸送船二中破、飛行機自爆廿六、大破卅一、未歸還七十八機。

十日廿六日の南太平洋海戦に於ては米空母四・戰艦一・艦型未詳一を撃沈、戰艦一・巡艦三中破、飛行機二百以上を撃墜破したが、我方また空母・巡艦各一を小破し飛行機未歸還四十機に達した。

十一月十八日發表の第三次ソロモン海戦に於て敵巡艦八・驅逐艦五・輸送船一撃沈、巡艦三・驅逐艦三乃至四・輸送船三・大破、戰艦二・中破、飛行機七十三機撃墜破した。我方は戰艦一沈没、同一大破、巡艦一沈没、驅逐艦三沈没、輸送船七大破、飛行機卅二機自爆、未歸還九機。かくて日米決戦の様相は漸く深刻化した。

十一月卅日夜ルンガ沖夜戦に於て敵戰艦一・巡艦一・驅逐艦二を轟撃沈、驅逐艦二に火災を起さしめた。我方は驅逐艦一沈没。

一四、その後の大陸戦線

香港攻略戦

支那方面海軍の陸海空諸部隊は、大東亞戦争勃發とともに、まづ香港攻略戦に参加して赫々たる戦果をあげた。昭和十六年十二月十五日、南支海軍部隊陸戦隊は香港に對し猛烈なる砲撃を加へ、市内各所に火災を生ぜしめ、更に二十一日には軍艦〇〇〇陸戦隊は陸軍の追撃部隊に編入して九龍に進撃、二十二日には軍艦〇〇陸戦隊もストーンカタール島に上陸、島内掃蕩を行

ひ、ストンカッター砲臺に於て十二砲・彈藥一八〇〇、ほか各種砲彈・山砲・機銃・小銃彈等多數を鹵獲した。また二十三日香港に向け進撃中の陸戦隊一部は大澳を掃蕩し、敵性艦船のほかに軍需品多數を押収したが、二十六日敵の降伏と共に陸軍部隊と連絡、香港島に進駐し、午前八時三十分、英海軍工廠を占領、翌二十七日海軍擔任區域の警備に就き、他の一隊は青州島を占領した。

香港攻略戦以後は大きな作戦なく、昭和十七年一月八日、廈門方面海軍部隊陸戦隊は、鼓浪嶼にテロ團を掃蕩すべく對岸より鼓浪嶼及び廈門島半頭山に上陸して、同地一帯の敵を撃滅、上海方面部隊は、一月七日及び九日平湖附近に於て、敵の有力部隊と交戦これを撃攘した。また海南島部隊は一月十八日大東亞戦に乗じ奥地で蠢動せんとする殘敵掃蕩を開始し、數次の出撃によつて敵屍七百十六、捕虜三十七、焼却兵舎三千八百五の戦果をあげた。三月中旬陸軍が太湖方面作戦を展開したのに對し、上海方面部隊の陸戦隊がこれに協力、敵屍二十二、捕虜二十八を得たほか、武器・彈藥多數を押収した。青島陸戦隊は三月下旬から四月上旬に亘つて、陸軍と協力、遊撃匪の討伐作戦を展開、威海衛南方の文登方面を始め、石島外圍地區の掃蕩を行ひ、遊撃匪の全部を討伐した。更に四月十六日には王哥莊方面に出撃して、敵匪多數を潰滅さ

せたが、威海衛陸戦隊も同日下庄方面を掃蕩し、次いで四月二十五日黎明を期して石島襲撃を企圖した共産匪約二千五百餘を邀撃、僅か二十六名の砲艇隊は陸軍部隊と協力、これを潰走せしめた。なほ三月から五月にかけて、中支鄧陽湖方面に活躍中の陸戦隊は、江上部隊と協力、占領地肅清を行ひ、海南島部隊は數次に亘つて掃蕩戦を展開した。

浙南作戦

香港攻略戦以來、支那大陸において陸戦隊が最も活潑に活躍したのは、十七年五月中旬から火蓋が切られた浙東作戦と七月七日を期して開始された浙南作戦である。陸軍は五月十五日拂曉を期し、浙東方面の敵暫編第九軍及び第八十九軍に對し一齊に總攻撃を開始した。忽ちのうち東陽・金蘭・衢州を攻略して敵第三戰區に再起不能の打撃を與へたが、海軍部隊はこの作戦に呼應して、温州東方王環島を中心に蠢動する敵匪を徹底的に剿滅すべく、五月二十七日〇隻の艦艇を以て一齊に行動を開始、二十八日海門鎮東南方の浪磯山島の敵壘を破摧し、三十日未明には松門の敵陣地を粉碎、三十日未明王環島に到着、陸戦隊の精銳は直ちに北方深浦・東方坎門の二方面より敵前上陸を敢行、浮足立つ敵匪を追撃、同日午後王環縣城を占領した。

引續き周邊一帯及び島内主要地點を攻略、所期の目的を達成した。

また浙東進撃の陸軍部隊に呼應し、鄞陽湖方面の陸戦隊は、六月一日突如行動を開始、折柄の増水季と連日に亘る豪雨に濁水満々たる鄞陽湖に突入、〇〇部隊長指揮の陸戦隊は、〇〇隻の舟艇に分乗して、陸軍平野部隊と協力、曉闇を衝いて進撃、都昌前面の大洲島・大鷄島の兩島を占領、一方海陸の主力部隊は、敵の銃砲火を冒して都昌沿岸に肉薄し、奇襲敵前上陸に成功、潰亂する敵を隨所に捕捉殲滅して、二日午前六時三十分都昌を占領した。更に六月六日、海軍陸戦隊の精銳は、康山附近一帯の殘敵を掃蕩、十三日には鄞陽湖下流六湮附近に進出して、敵の砲撃を制壓、十七日瑞洪（康山南方約十七キロ）に突入した。

二十六日朝には八字腦に敵前上陸を行ひ、十一時間餘の激戦によつて敵二十一軍第四百七十七師を撃破、同日夕鄞陽湖岸第一の要害饒州（鄞陽）を占領、敵屍二百・捕虜五十・武器貨物多數鹵獲の戦果をあげ、陸軍部隊の江西作戦を有利に導いたのであつた。二十七日江上艦艇も饒州に入港、〇〇部隊長は幕僚を従へて陸戦隊を閲兵した。

七月七日の支那事變記念日を期して開始された浙南作戦に於ては、海陸協同部隊は麗水・青田と甌江沿ひに進撃、行動開始以來五日、七月十一日午後十時卅分、東支那沿岸の要衝温州縣

城を攻略し、更に行動を起し十三日瑞安縣城を屠つて、浙贛戦線廣袤十餘萬軒を制壓するに至つた。七月十日隱密裡に甌江附近一帯に集結した平井部隊長指揮の陸戦隊は、爾來砲艦と小舟艇とを利用して、敵彈雨飛の中を甌江、飛雲江及びその附近海岸に對し、暴風雨下にも拘らず必死の水路啓開作業に努めてゐたが、突如十七日の早曉、海軍陸戦隊を舟艇に便乗せしめ、白々と明けゆく甌江河口の黃華村に迫るや、壯烈極まる敵前上陸を敢行した。直ちに磐石衛方面に向つて疾風の進撃を續け、午前七時半、七里を占領、更に南北に進み、尙家坪を経て烏牛山麓沿ひに再び甌江河口に出て、一部隊は快足を利用して午後一時半、磐石衛城東門に殺到、これを無血占領した。午後二時五十分、温州を攻略して南下した陸軍部隊と握手した。陸戦隊は十八日早朝より烏牛山山中に遁走せる殘敵を討伐し、二十日上垵田村・下垵田村（磐石東方五キロ）附近の敵を掃滅、浙南作戦に止めを刺し、第三戦區の援蔣毛細管ルートの名實ともに完封した。

かくの如く上海事變以來、本格化した皇國海軍陸戦隊の活動は、支那事變から、更に大東亞戦争へと、戦線が擴大されるに従つて、益々その眞價を發揚し、大陸に、洋上に、縱横無盡に活躍しつゝあるが、今後の動きについては更に補足することとして、ひとまづ、この邊で擱筆

する。

〔註〕 國民政府は昭和十八年一月九日を期して對米英宣戰を布告し、日華一體、大東亞戰爭完遂の共同宣言を發表した。

日本海軍陸戦隊史 終

大 新 社 新 刊 名 著

大本營海軍報道部推薦

海軍少將 七田今朝一 著

海 戰 の 變 貌

B 6 版上製
二圓五十錢 (〒20)

近代海戦の様相は刻々と變化してゆく。ことに大東亞戦争に於ける、アメリカの執拗にして強靱なる反撃の例を以つてしても亦嘗て例も見ない「海上決戦の連続」といふ近代海戦の特質に鑑みても明かである。本書は帝國海軍の眞姿と海戦の變遷を歴史的に理解する様詳述し、以つて敵米英撃滅の決意を鞏固にせんことを國民に要望せる書である。

昭和十八年六月十日印刷
昭和十八年六月十五日發行



出文協承認ア四七〇二二八
初版發行部數 五千部

日本海軍 特別定價二圓
陸戰隊史 特別行爲七錢
稅相當額 賣價二圓七錢

著 者 山口喜代松

發行者 東京市下谷區車坂町八九 鈴木勝也

印刷人 東京市神田區錦町三ノ二 菅生定祥

東京市下谷區車坂町八九

發行所 大 新 社

電話下谷(83)四七六七番
振替東京一七一七七一番
文協會員番號一一六〇九〇

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元 日本出版配給株式會社

刷印所刷印榮協 (東東三一九八)

1-E45-68

大野 慎著

民族の勝利

日本民族の優秀なる所以を力説、日本世界観を解く……

B 6 版三八〇頁
二 圓(〒15)

日比谷與志雄著

青年魂

青年に新しき物の見方、考へ方を説き、青年奮起の糧とする

B 6 版二八〇頁
一 圓五十錢(〒15)

松井糸子著

燈心草

戦首勇士に捧げた乙女の純愛！ 銃後の乙女に捧ぐ書……

B 6 版三八〇頁
一 圓八十錢(〒15)

—— 著名行刊 社新大 ——



